大正六年九月十四日（第三種郵便物認可）
大正十三年二月一日（毎月一回一日発行）（第七輯第二號）

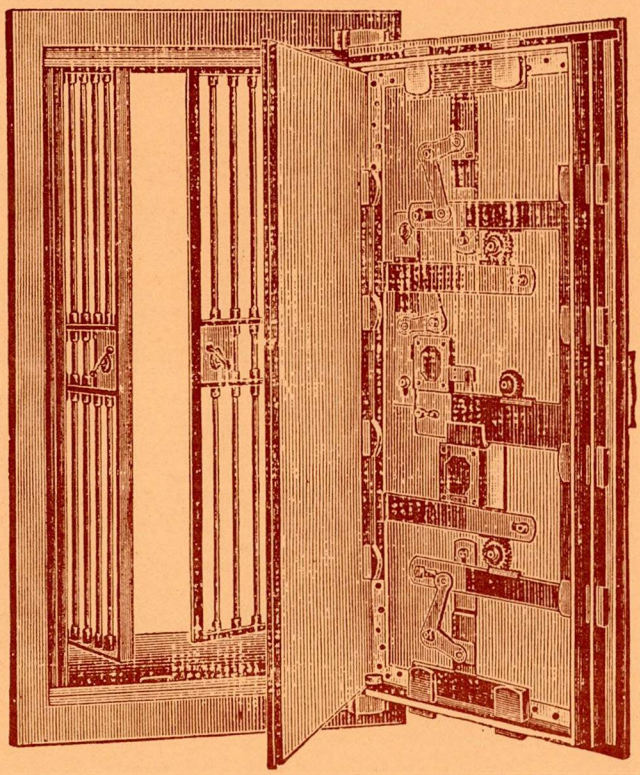


第七輯第二号

日本建築協會

大正十三年二月一日

耐震耐火 理想鐵扉の出現



金庫扉 金庫扉製造界の權威

大谷金庫店

店主　大谷榮之介

顧問工學博士　細木松之介

獨逸人技師　ア・シューハルト

営業所　東京市京橋區岡崎町二丁目
京都市松原通東洞院東入
大阪市東區淀屋橋筋（道修町）
神戸市楠町六交叉點西

工場　東京第一工場　東京市京橋區佃島壹丁目
仝　第二工場　仝　深川區東元町
京都分工場　京都市松原通り大宮西入

高級昇降機

エー・ビー・シー

▼現在ノ最大建築ニ使用サレ！

▼今後ノ高層建築ニ採用サレントス！

最近御採用御先方御報告

丸ノ内ビルデンク	十一臺
日本郵船	八臺
日本興業銀行	四臺
中外商業新報社	一臺
特許局	一臺
阪急電鐵	一臺
泉尾土地會社	二臺
大學病院	二臺
松竹キネマ座	二臺
神戸商船ビルヂング	四臺
明治海運ビルヂンク	四臺
淺野物産	一臺
村井銀行神戸支店	一臺
プラナモンド社	二臺
内田ビルヂング	三臺
明治屋	二臺
其ノ他	拾臺

A B See!

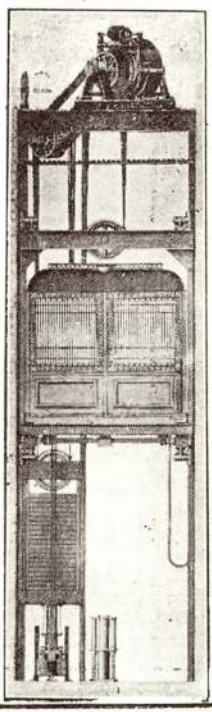
ELECTRIC ELEVATOR CO.

220 Broad Way New York

ESTABLISHED IN 1883

Esteemed enquiries solicited!

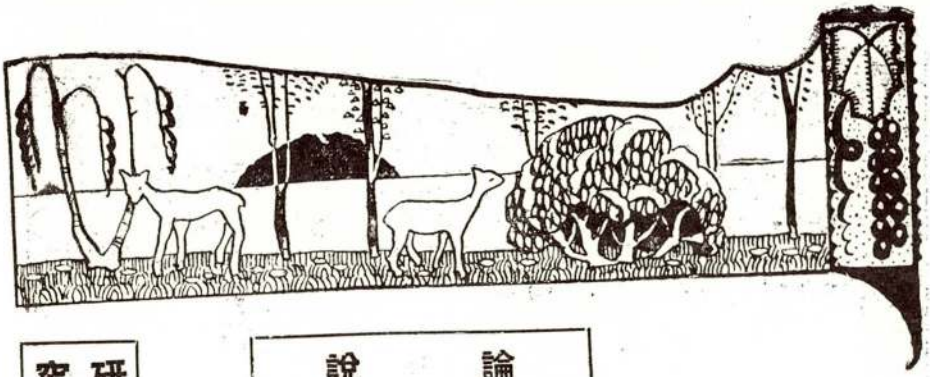




東洋總代理店

内田商事株式會社機械部

東京　神戸　大阪



建築と社會　第七輯第貳號目次

口繪（大阪府知事新官邸
同……其一、其二

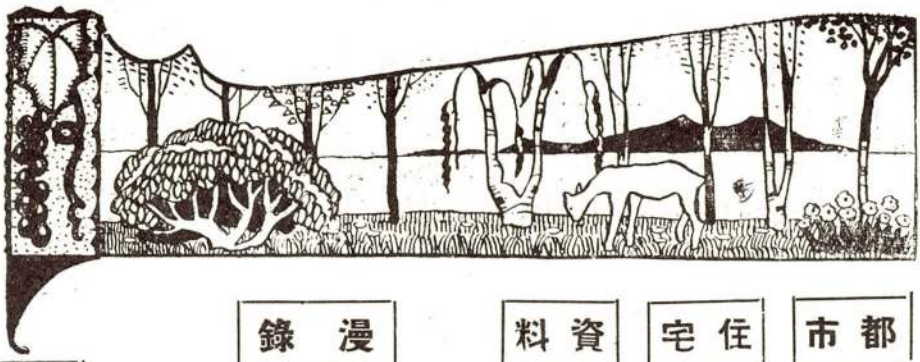
「巻頭語」・『住とは』……

論說

○裸體建築を提唱す……伊藤　正文・二
○御成婚紀念事業としての都市計畫……工學士・園部　文雄・六
○防火地域の設定に付て……工學士・宮本　長治・一〇
○「コンクリート」より「鐵筋コンクリート」まで（一）……中村　鎭　一三
○建築藝術に於ける歷史の問題……山崎萬壽夫・三二

研究





都市

○震災と都市問題雜記……楠原祖一郎・三五
○田園都市への理解……別所　悌一・四〇

住宅

○大阪府知事新官邸に付て……澤原　隆夫・四八

資料

○關東方面震火災被害視察日誌（一）・小川安一郎・五〇
○紅波山の窟墓見物（二）……工學博士・天沼　俊一・五五

漫錄

○建築紋情篇……廣田峰太郎・六八
○美の對象としての建築……水町與志雄・七三
○慈眼院堂塔建築……池田谷久吉・七七
○大阪市の住宅……玄　黃　子・八三

會報

日本建築協會一月中記事……



理化學研究所發明

アドソール室内乾燥裝置
アドソール冷房裝置
アドソール媛房裝置
アドソール溫濕調整裝置

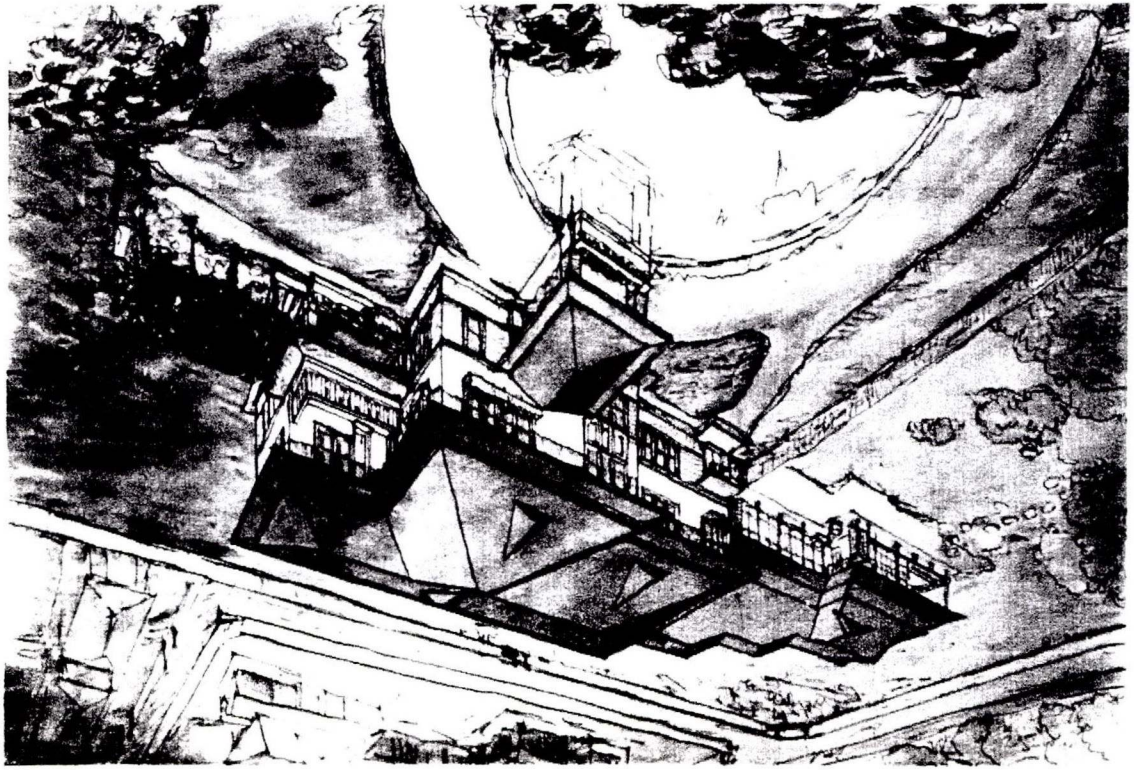
一、食堂、興行場、各種工場、病院、土藏、倉庫、下室の理想的設備。
一、絶對防火は地下室の外不可能の事は今回の火災にて立證せられた、地下室の濕氣を防ぐにはアドソール乾燥裝置に限る。
一、各裝置の說明書は御申越次第御送附します。
一、各裝置の設計製作工事の請負を致しますから御下命を願ひます。

東洋瓦斯試驗所

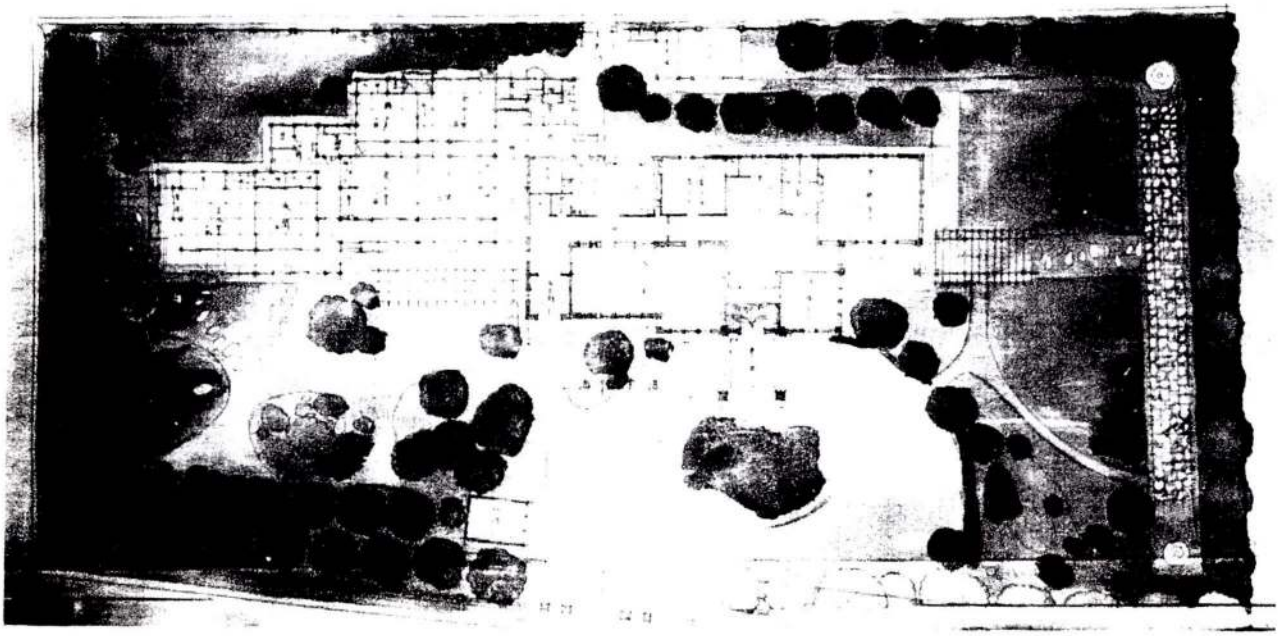
東京市丸の内

久原商事株式會社大阪支店

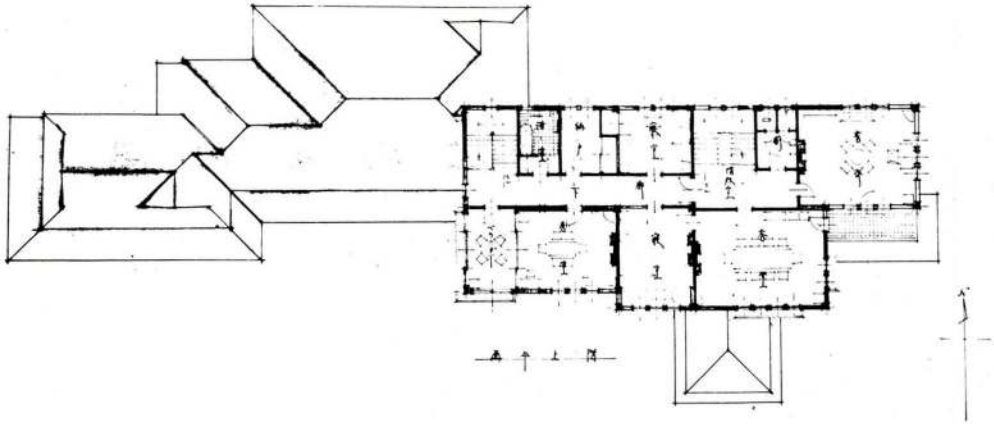
大阪市中の島



大阪府知事官舍配景圖



同　平面圖の一



大阪府知事官舎部
新築工事概要
昭和八年五月調

二　の　そ



『住』は「柔」であり、「從」である。「柔」は、美の生活を象徴し、「從」は自然な順應して、之を厚生と成すの謂ひである。而して、さらに「住」は「充」でなければならぬ。蓋し、それが、精神生活醇亨の一表現であり、物的生活の一充足を謂ふものである。

（郊邨）



『裸體建築』を提唱す

伊藤正文

帝都は將に復興されんとしてゐる。各都市亦改造の機運に向ひつゝある。此時に當て私が茲に提唱せんとする所は既に建築家及都市計畫の當路の人々の間には唱へられてゐる筈のものであるけれども、『建築と社會』の誌上を借りて都市生活に親しみの深い、そして又都市の狀態及その改造に直接利害を持つ人々に對して、廣く理解をして戴きたいと云ふ意味に他ならないのである。

脆弱なる地盤の上に建設されてゐる可燃性の家屋の密集せる我國の各都市を如何なる方法によつて改造し、都市民の生活に恒久的の觀念を與へ得るかと云ふ事は廣汎であり又重大な且つ緊急を要する懸案であるに違ひない。併し乍ら私は今この一部分、日本の都市を構成してゐる不安なる建築群をして、如何なる形式の下に如上の懸案に解答の一つを與へ、滿足せしむる樣な改造の途に向はしむ可きやの一點を論じたいのである。

最近に於て地震の災害に刺戟されて、耐震耐火の建築構造は今更の樣に喧傳され、鐵筋コンクリート構造を以て最も理想に近き進歩せる建築構造法として認められるゝ樣になつた。勿論現代に於て世界を通じて此構造法こそ最も進歩せるものであり、且つ我地震國に於ては特に良とす可きものであらう。只鐵筋コンクリート構造と云ふも、手法に種々の差あるが爲にそれぞれの手法による經費の高低あり、又設計のプリンシプルによつて強度に階梯あり、意匠の方法によつて美觀上の優劣あることも當然の結果である。

今、鐵筋コンクリートが理想的の構造法であると云ふ見地に立ち、手法上の差異其他の特失等の學究的の技路に進むことを避けて、主要の概論を進めたい。

題して裸體建築と云ふ所は單に化粧せざるものと云ふ意のみならず、構造體そのまゝの露出、即ち衣服を着せざる人體の裸形の如きを意味するものであつて、鐵筋コンクリート構造體の外部に被覆を爲さゞる儘に、建築的價値を備へたるものを新しき都市に、特に我國に於て、建造する事が國家的にも、社會的にも効果あらしめる所以のものであると信ずるのである。

□

大災害に伴ふ大打撃は不況の經濟界を益々悲境へと導き、國民として國勢の復興を計るに最大の努力を要する秋であるが、大戰時代の好況の夢尚醒めずあらゆる贅澤品の製造は必需品の生産能力を侵し、堅實なる社會經濟の進歩は心もとなく感ぜられる。建築界に於ても又奢侈的の傾向以上に贅澤にして浪費的な裝飾をほどこし、美術的なりとした風潮が未だに去らず、經濟的の見地のみならず美觀の立場より見るも尚不要に近い所謂美術建築が大小となく建てられつゝある。斯の如き機に際し、尚又我國の如き經濟力薄弱なる、所謂貧乏世帶の國に於ては生活に缺く可からざる建築の如きも、最も安價にして他

の建築的價値を損せざる程度のものを建つべきであり、特に大災害後の今日各都市の廣大の範圍にわたる建築物改造に當ては尙更如上の意味に於て徹底ずるを要する事と思ふのである。先づ此點に於て裸體の建築を最も適當なる方法によつて建つるを至當とする譯である。

□

次に我國の地勢は佐藤工學博士の所謂外面女菩薩內心女夜叉とも云ふべき地の構成と最も危險なる缺陷を有することは云ふ迄もないが、爲に大震激震となり、地上に我等人間の建設するものを遠慮なく破壞し去らんとする。之こそ我國民の運の惡さであり、又その自然力に對抗せんとする科學の力に鞭達を與へるものであるのかも知れぬが、我等の生活の安固を或程度迄、此意味に於て確立することは國家的の急務であらう。茲に於て鐵筋コンクリートの耐震耐火構造によつて出來得る限り安全なる建築を構造すべきである。即ちカーテンウォール式の構造よりも寧ろ壁體までも鐵筋コンクリート造とせるものはブレイシングウォールを完全に有するものとして、はるかに耐震的である。(カーテンウォール式にても充分の構造は可能ではあるけれども)面して之を裸體のまゝに露出するならば、強度以外の他の建築的價値を充分に滿足せしめ得可きであらう、

□

都市美は綜合的の美であつて個々の建築の美の集合のみによつては構成されぬ。街路の曲り工合陽の受け方、街路樹の繁りと色合、廣告物の散布の程度とその意匠、建築物の高さと街路巾、空の色合と建物の面及色の關係、交通機關及通信機關の狀態、通行者の服裝の色、交通量、風速の程度狀況、水蒸氣

の量、建築物の意匠　等各多方面の條件を要素として調和の美を現出するものであるが故に、建築のファサードのみを個別的に意匠することは却て郊外の住宅、農家工場等の方が安易であるとも思はれる。都市美の一要件としてそれに添ふべき建築を作らんとするならば、如上の種々なる條件を考慮に加へなければならぬ、隨て建築物としてよりも建築群としての効果を要求する。即建築群としての美は個人が意匠することは極めて困難であり、多數の建築家の作品の集合體の總和の美である、卽ち多樣であつて統一のある面白さ、美しさである。

此點が都市建築美の根本であるとして考へるならば、他に都市民の生理的、又心理的効果は伴ふがそれは考へに入れずとするも尙次の如き結論に達するであらう。即ち、最も簡單なる平面的の意匠であつて色彩も、都市に散布する他の色彩と穩に調和し易き色でなければならぬ。從て又、都市の建築は殆どファサアドの建築であるから之をして簡素ならしめ灰色の如き刺戟の少い色とする事は効果の多い事と思はれる。

それに綠色の樹木、赤や黃や空色の廣告が散見される街路は人々に美しいと思はせるに違ひない。鐵筋コンクリートの裸形の家はそのまゝ美しいものとなるであらうし、無意味な裝飾は却て美を傷ける場合もあるであらう。又、所謂デカダン的の美と稱せらるゝものは不健康な汚らしさのある美であつて、コンクリートの建築の美は健全なる男性的の美である　構造卽力の美が現れる。云ひ代へるなら都會と云ふ自然の前に漂された面のファクチユラの美である。テラコッタの面や張瓦の面は自然力の前には女性的の感を與へる。此等の事柄より考ふるに、粗面な裸體建築は都市の美觀を構成する要素であり、その美は建築の裸體美である。

以上述べ來つた各方面の觀察を以つて裸體建築提唱の所以とするものである。

御成婚紀念事業としての都市計畫

工學士　園部文雄

一

更新復興の年の初めに當り、嘉辰を卜して仁政海内に溢れ、國民の尊崇と愛慕とを御一身に集めさせられてゐる我皇太子殿下には、仁慈淑德、國民の仰望措かざる久邇宮良子女王殿下と御成婚の大典を擧けさせられたる事は誠に芽出度き事の極みであつて、億兆の歡喜これに過ぐるものはない。

吾々は兩殿下の御盛典を壽くと同時に、兩殿下の御盛德は必ずや金甌無缺の我國をして益々向上せしめ靈光を四隣に發揮せしめられること明なかるを思ふて、御盛運の彌が上に高からん事を祝福せざるを得ない。

二

この芽出度き時に當り、國民として、特に其國民を代表する都市の住民として誰しも考へねばならぬ事は如何にしてこの芽出度き事を紀念すべきかと云ふ事柄である。

皇室の御繁榮は國の繁榮であり、國の繁榮は取りも直さず國民の幸福となる、君民同體一家の親しみをなせる我國体に於ては　大内山の御慶典は直ちに我國家、國民の至福、至幸であらねばならぬ。そして我々は何等かの方法に於てこの御盛儀を紀念し、御二方の新しき御生活に入らせ給ふを奉祝すると仝

時に、日本の歴史の新しきページをして意義あるものとせなければならぬのである。

三

紀念の手段、方法としては數多のものを擧げ得るであらう。これを史實に徴しても古來芽出度き事を紀念する爲には可成り色々の事業をなして居る樣である。

『エヂプト』に於ては皇帝の卽位と共に直ちに『ピラミッド』を築き初めた、そして在位年間これを繼續して數十年の長きに亘つて數十萬の奴隷を使役し、あの膨大なる建造物を築き上げたのである。當時の宗教より謂へば肉體は死しても靈魂は死するものに非ず、地上の住ひは一時の住ひなるも『ピラミッド』內の住ひは永久の住ひとなるのであつて國民擧つて皇帝の繁榮を祝福して多大の勞役を犧牲にし、あの大建造物を築き上げたのであり、墓墳と見るよりも一種の紀念事業と見るを至當とすべきものである。

希臘に於ては美はしき殿堂を建てゝ國家的の紀念物とした。世界一の美建築と稱せらるゝ『パルテノン』の如きは其一例であつて『アテナ』全盛時代に造られしものであり、右手に勝利の鳥を持つた、武裝せる黃金造りの『アテナ、パルセノス』の女神が芽出度き表徵の彫刻を以て飾られたる石造の建築『パルテノン』殿堂內に祭られて國民仰慕の中心となつて『アデン、アクロポリス』の上に建つて居た事は美其ものゝ表現として既に古今に有名なる事實である。

羅馬に於ては多くの凱旋門を建て、敢て戰捷に限らず、皇帝の紀念、公共事業の紀念、個人の紀念に供し尙又都市修飾用として用ひたのみならず、一方、大なる石柱を建てゝ四周並に頂上に夫々彫刻をなして紀念の意を表さしめたのである。

其後引續き此の思想は近世に迄及んで、紀念と仝時に都市修飾の用に凱旋門又は石柱の類を建てる事

多く歐州各地の都市の目貫の場所に此の種建築物の存するもの今日に於ても甚だ多いのである。

東洋方面に於ては支那各地に於て見る所の孝子節婦の碑を初めとし、多少政治的意味を含める帝室關係の建造物や、純頌紀念の建造物も可なり多く各地に散在して其意匠に於ても見るべきものが多い。

四

近代に於ては社會の組織も複雜となり、人心の要求する所も多岐に分れ來りたるを以て紀念とすべき事業の種類も自ら多くなり、單に牌碑の如きを設け、棲門を築き、殿堂の築設を以て滿足せる有樣となり此等骨董的築設物よりも寧ろ國利民福を助長すべき施設物を築設するの有利なるを說く人も自然多くなつて居る。

この見地よりすれば產業の增進を促進する目的を以て博覽會の如きを開くも一法たるべく、敎育機關の完備充實を計るも一法たるべく。思想の健全を期する目的を以てそれに必要なる方法を講ずるも一法なるべく、各種の社會問題を解決するに足るべき施設をなすも亦其一法たるを失はないであらうし、國民の保健を向上せしむる爲運動設備を完備するも其方法たるべく、或は美術に或は文學に或は政治に或は經濟に或は科學に其他擧げ來ればこの際紀念的に改善、新設を要すべきもの限りなき程あり、何れも相當の意義を有し必要なるものゝみなる事亦明かである。

然しながら以上のものを各都市に就て又は團躰個々に就て考ふる時は自ら其必要程度に大差あり、甲の土地に於て非常に時勢に適したる紀念事業たるべきものも乙の土地に於ては大金を投じてこれを造り永く紀念とすべき程のものならざるものもある。此故に以上の種類のものは各地共一樣に實施を要する程度のものとは云ひ難いのであり、又この種紀念事業の性質上一時的の紀念方法よりも永年に亘つて紀

念し得べき性質のものを撰ぶ事の賢なる事も亦贅言を要せざる所である。

然らば何を以てこの曠古御慶典を紀念すべきか？都市計畫に勝るものはないのである。

五

我國の都市は何れも其築設當時より自然の發達に委し、或種の計畫の下に發達せしものは全く無いと云つてもよい。從つて其内容に於て甚敷く無理なる點があり、近代的文明都市たる要素を缺く所が甚だ多いのである。

昨年の震災はこれらの缺點を遺憾なく暴露したものであつて、一朝の天災に遭遇すれば見るも無慘に潰滅する事のよい實例を示したに過ぎない。

而して東京、橫濱の如きは我國に於ても主要部類に屬し、其施設に於ても比較的高級の部に位せしものであつた事から　見れば其他の都市はより以上の危險狀態に放置せられてあると云ふも敢て過言ではないのである。

この意味から謂つて我國の大部分の都市は何はさて置いても其都市計畫を實施する必要があり、此際紀念事業としてこれを實施する事は最も有意義なるものとなるのである。

吾々はこの芽出度き年の初めに於る御慶典の紀念として是非近代文明の源泉ともいふべきこの事業を實施して、永く後世の紀念とすると仝時に子孫と共に其喜びを頒つべきである。

× × ×

防火地區の設定に就いて

工學士　宮本長治

過般の震害は、我々は相當大規模な災害に對する防備として、今さら客年の震災に就いて繰り返すのは奈何やと思ふが、當時の災禍が示した事に就いて、少々書いてみたい、蓋し、將來に處する上に於て必ずしも無用の業ではあるまいと思ふ。萬一の場合を色々想像して居たことが、實際に實現された譯で其點に於て非常に驚嘆したのである。而して彼の慘狀は、無論地震が第一の動機ではあるが、地震其ものよりも、寧ろ、地震に因つて起つた所の火事こそ、斯る慘害を惹起した直接の原因であると云ふことは、誰しも考へることであつて、少くとも東京、横濱に於ては、大體此言葉は當つて居ることだらうと思ふのである。仍で、大火は大地震の時に起る場合が多いのであるが、又地震の時ばかりでなく、他の種々な原因からも屢々起るものである、と云ふことを、我々は常に經驗して居るのである。其の屢々起る所の火事が、偶然にも烈風の時に際會すると、それが、必ずしも今度のやうな大災害でなくとも、あの半分位にしろ、兎に角、大事件を惹起するものである、と云ふことは、當然心配せられなければならない事實である、さう云ふ方面から考へて、都市の建築はどうしても、耐震耐火の建築でなければならないと云ふことも、亦當然なことであるが、此度は、其のことの實例を見せられ、極めて痛切に其感を深くした譯である。所が、誰しも、それはそれに違ひない、と云ふであらうし、都市の建築を總て耐震耐火的にすると云ふことは、理想ではあるが、之を實行することは、經費の關係とか、從來の習慣と云ふやうな種々の事情もあり、殊に、まだ、市民全體が、其の構造に對して、完全な理解を有たない爲に

實際は、其實現がなか〳〵難しいのである。又、偶々耐震耐火の建物が割合多く市内にあるとしても、其周圍が、燃える性質を有つて居る所の木造建築が非常に多いと云ふやうな場合には、折角の耐火的構造も實際は役に立たない。即ち、周圍の火勢の爲に、其耐火的効力を實際に發揮することが出來ない、と云ふことは、今度の東京横濱の例で一層深く感せられるのである。それで、是は、どうしても、都市の此方面の防備としては、都市計畫に於て、其都市の重要な部分に、徹底的防火地區を設定して、其の災害を防止することにしなければならない、と思ふのである。

我大阪に於ても、先般愈々防火地區が設定されて、客年十月一日から實施せられたのであるが、あの防火地區の選定をして實際的効果あらしむる爲の都市の防備としては、非常に不徹底な、極めて消極的のものに過ぎない、と云ふことを、非常に遺憾に思ふのである。其設定に至るまでの經過を極く概略に申し述べると、大體、都市計畫委員會に諮問されて來た内務省の原案は、もつと遙に防火地區の多い、もう少し徹底的なものであつたんであるが、それが種々な事情から、それでは、餘りに大阪の市民に對して苦痛が甚しい、と云ふやうなことで、現在施行されて居るやうな程度のものに滅縮せられたのである。其の滅せられた理由の中で、私が一番遺憾に思ふのは、斯う云ふ點である。即ち内務省の原案では先づ大阪の都市計畫で決めべき所の主なる道路の擴張である。是から擴張する路線の兩側は、今や絶好の機會であるから、是非防火地區に指定したい、と云ふやうな案であつたのである。それが、愈々決定せられたときには、丁度それと反對の理由で、今此路線を擴張する爲に兩側の土地を切取る、それは切取られる人に取つては非常な苦痛である、其苦痛を與へて、尚ほ其上に防火地區を其部分に指定して、耐火構造を强ひると云ふことは、其人に二重の苦痛を與へるもので、それは堪へられないことである、と云ふ理由から、その擴張する路線の兩側の防火地區は、大部分止められてしまつたのである。私は、此防火地區を徹底的に實施するのには、矢張り、原案のやうに、今後擴張せんとする路線に防火地區を

指定するのが適當であり、それには、其時が見遁すべからざる好機會である、と云ふ初の考へを今も猶ほ棄てることは出來ないのである。併しそれは、種々な事情があつて、彼樣な結果になつたことを、遺憾に思ふのである。

それで、過般の、關東地方、就中東京横濱の慘害に鑑みて、之を機會に、此防火地區は、更に徹底的に增設して施行せなければならぬものであると云ふことを考へるのであるが、斯の點に於て、諸君の共鳴を得たいと思ふのである。

墨染の夕べの山をながむれば

松の立てるもさびしかりけり

『コンクリートブロック』より鐵筋『コンクリートプロック』まで（一）

═附　中村式鐵筋「コンクリート」に就いて═

中村鎭

一　序論
二　中空構造論（複構造論）
三　構造法の發達と其種類（綜合的構造法への道）
四　鐵筋『コンクリート』建築構造の得失
五　中空構造としての『コンクリートブロック』及び『ホロータイル』の發達
六　鐵筋『コンクリートブロック』（綜合的建築法）の出現
七　中村式『鐵筋コンクリートブロック』に就いて

鐵筋「コンクリート、ブロック」に就て、私は數年來研究し又實驗した多少の意見を持つて居るので何等かの方法に於て、纏めて發表したいと思つて居た。嘗て雜誌「建築評論」や「建築世界」に其の一部を發表しかけたのであるが、途中から病氣になつて止めてしまつた。今茲に十分とは行かないけれ共、研究の概要を發表して見たいと思ふ。

一序論

鐵筋『コンクリート、ブロック』と言ふ名稱は未だ普遍的のものではない。それと同程度に於て、鐵筋『コンクリート、ブロック』なる新構造法は、未だ普及せられてゐないところの嶄新なる構造法である。私は此の新構造法が、將來建築構造に對して、非常に大きな使命を持つて居る優れたる革命者であると信ずる。それで自分が是れに對して研究し得た意見の一端を發表して、世の建築學者及び技術家方の批判を仰ぎたいと思ふのである。

建築は、其の目的(用途)に向つて完全なる答をなす可く材料及構造法を活用して意匠を遂げるものである。而して其の過程に於て必ず經濟と云ふ要素が加つて來る。

「文明が進歩し文化が高められれば、その目的要求の度も高められ、且つ廣められて行く。從つて是れに完全なる答をするためには材料構造意匠等の非常なる進歩を必要とする。又その複雜化された要求に向つて完全に答へをする爲には莫大なる費用を要するので、經濟の問題が非常に深く關聯して來る」

新材料新構造法の出現の理由、從つて是に依つて生ずる革命は實にこの複雜化されたる目的用途に對して、現代の科學及び藝術が經濟的要素を十分に取り入れつゝ、如何に完全なる答をなさんとしつゝあるかの其の最高標準を示すものである。

鐵筋『コンクリートブロック』の出現も實に上述の意味に於て『優れたる革命者としての使命を有する者である』と私は思ふのである。

是れを實例として見るに、優良なる鐵及びセメントの材料としての出現、並びに鐵筋『コンクリート』構造法の出現が、如何に現代の複雜化されたる目的用途に向つて貢獻すること多く、如何に建築の意匠形態を半世紀前と全く別のものに變へつゝあるかは、建築界の學者技術家の等しく熟知し感歎してゐる

處である。併しながら此の革命者鐵筋『コンクリート』の威力を以てするも、尙今日の複雜化せる高き目的用途に向つては十二分なる滿足を以つて答へられては居ない。

(一)其處には保温防濕等の衛生の問題が殘されて居る。

(二)構造の困難に依る時日浪費の問題が殘されて居る。

(三)又壁厚の薄きために起る外觀の問題が殘されて居る。

(四)而して最も大きく鑄造するために要する假枠に關聯して經濟の問題が横はつてゐる。

是等の諸問題を解決し、鐵筋『コンクリート』をして現代の高き目的用途に對して完全なる答へをなし得る建築法たらしむる事、並びに是れと同等以上の建築法を考案することは、現代の建築界にとつて最も緊急且つ重要なる問題と言はなければならぬ。

是れを單に經濟と云ふ一點に立ちて見るも、鐵筋『コンクリート』を以て代表される有力なる建築が、現代の吾國の經濟程度を以てしてはその初價(ファースト、コスト)に於て非常に高價なるために、止むなく木造準耐火建築と稱せらるゝ如き劣等なる建築法を、都市に於てすら建築することを認可せざるを得ない有樣である。

斯うなると、一方に於ては日本の文化は何時迄も其の進展を遮られる事となり、又他方に於ては建築家が如何に優良建築を多く建築して國家社會に貢獻しようとする大望を抱いて居ても、その大半はいたづらに焦燥を重ねつゝ、その志とは全く相反せる貧弱なる木造耐火建築等の建築家たらざるを得ないのである。

若し茲に新材料新構造法の發明或は改良が企てられて、鐵筋『コンクリート』を以て代表される建築法が、不完全なる木造準耐火建築と同一價格又は近似の價格を以て建築さるゝ樣に成らしめたならば、誰が好んで貧弱なる且つ耐火耐震の不完全なる、而も究極に於ては不經濟なる木造準耐火建築を爲すもの

があらう。從つて是等國家社會の憂ひ並びに、建築家の是れに對する焦燥は一擧にして解決せらるゝであらう。

私がこの問題を今日建築界に於ける緊急焦眉の問題とする所以のものは實に此處に存するのである。更に構造の方法に就いて是れを見る時、建築に於て單構造よりも復構造の方が保温防濕等の衞生的問題より見るも、外觀の問題より見るも、亦配管配線等の問題より見るも、合理的で且つ進歩したる構造法であることは論を俟たないのである。

然るに今日までの材料及び構造理論の程度では、之を殆んど空想に近き理想として冀望するばかりで全く之を成し遂げ得なかつたのである。其の主なる理由とする處は、是れを安全にする爲には、非常に多量の材料多量の面積を壁に費し、又非常なる構造の複雜さを解決す可き技倆と時日とを要した　それで構造に對する科學の幼稚なる時代に於ては、技術の點からするも、亦經濟の點からするも、到底なし得ない空想だとして放擲せられてゐたのであつた

若し是れが少量の材料を以て、輕快に又簡易に構造せられて、其の價格は寧ろ單構造より減ずるとも決して增さゞる樣に成し遂げることが出來たならば、此複雜構造の出現に依る國家社會並に建築界の喜びはどんなに大きいものであるか知れない。

鐵筋『コンクリートブロック』構造法の出現は、實に以上の如き重大なる使命を遂行せんとする革命者としての出現である。

然し斯かる斬新なる革命的方法の出現の最初には常に荊棘の道が選ばれてゐる。多くの反感や危險視がなされる事恰も社會の革命者の多くが其の目的の非常に高く優良なるに係らず、一般社會より危險視せらるゝ如きものである。

私はかゝる斬新なる方法も革命的のものとなさず、進化的のものとしてよく咀嚼し消化して自らの營

養とするの聰明が、吾建築界の學者技術家方に十分に備へてられて居るであらう事を信じたいのである。

二　中空構造論（複構造論）

序論に於て少しく言及したるが如く、建築法としては複構造は單構造よりも遙に理想的のものである必ずや將來の建築は單構造より複構造に向つて進むであらう事を私は豫言する。又そう進化する樣に自分の力の限りを盡して說きたいと思ふ。

複構造が單構造よりも遙かに進歩した合理的の構造法である理由は、次の各項目に分けて論ずる事が出來る。

（一）保温（耐寒耐暑）
（二）防濕
（三）外觀
（四）配管配線
（五）音響調節
（六）部分的强度
（七）材料經濟
（八）基礎輕減

以下之を單構造と比較して論究する。

（一）保温　熱の傳導に對して單構造よりも、中空構造の方が遙かに優良である事は多くの實驗が證明して居る處である。何故かと言ふと、空氣は熱の不良導體であるからである。若し此の中空内に空氣の

循環を防止する爲に或種の不良導なる空隙多き輕き物體(鋸屑の如き)を入るれば、更に其効を大ならしむる事が出來る。然し之等のものを入れないでも、其空氣の層を二重に又三重に重ねる事に依りて大なる効果を擧げる事が出來る。此點に於て單構造は遠く複構造に及ばないのである。

(二)防濕　に對しての中空構造の効果は尙熱に對すると同樣に其濕氣の傳達す可き距離を遠からしむるに依るのである。故に保温の爲になすと同樣に其中空を二重ならしむる事又は其傳達の一部を遮斷する事に依りて更に効果を擧げる事が出來る。右の理由に依りて單構造よりも遙かに卓越して居る。

(三)外觀　同量の材料を使用する時は、單構造は其當然の結果として複構造の中空の量丈壁厚が薄くなる。又逆に複構造と同樣の厚さを得んとすればそれ丈材料を增加する。故に材料の量を無視しない限りに於て複構造は常に單構造よりも其厚さが大となる。近代の鐵筋『コンクリート』の如く極端に其壁厚を減じて、尙且つ其强度を保證し得る場合に於ては、同一量の材料を使用する時複構造の方が遙かに壁厚が厚く、其外觀の莊重を保つ事が出來る。之は床及天井の構造に就いても亦同樣である。

又外觀に對して非常の重要な問題は、鐵筋『コンクリート』の『カーテンウヲール』式に於ては、其架構の骨格は外面又は室内に現はれ來る。而してそれが外面に現れる場合に於ても室内に現れる場合に於ても、其外觀の意匠を困難ならしむる。其結果は何時も外部及室内に柱及梁に依る突出に依つて、其外觀を著しく傷けられる。

是は床の下端即天井に於ても亦同樣である。

(四)配管配線　複構造は多くの場合、其中空を利用して配管配線等を爲す事が出來る。之に反して單構造は其壁の一部に溝を造るのでなければ、是を爲し得ない。殊に鐵筋『コンクリート』の『カーテンウヲール』や『スラッブ』等に於て之を爲す事は構造上非常に困難な事ばかりでなく又危險である。

(五)音響調節　音響は其材料硬く、質緻密に彈力大なる時に殊に反射の程度が強い。若し中空構造にする時には其中空は音響の反射に對しては、かなりの効果がある。

(六)部分的強度　同一量の材料を以てすれば是が中空を有する事は其隋性率を多からしむる事となり之を有せざるものより遙かに應曲力等に於て優れてゐる。

(七)材料經濟　同一厚の壁體を構造しやうとする時に於て、複構造は單構造よりも其中空丈材料を輕減する事が出來る。殊に近代の進歩した中空構造に於ては同一厚の單構造に比して四十乃至五十『パーセント』の材料をしか使用しないものもある。

(八)基礎輕減　壁體並びに床に於ける材料の輕減は基礎に來る死荷重を減ずる事が出來る。其結果基礎は、非常に輕減せらるゝ事となる。又空中壁體の部は(六)に述べし如く、其隋性率が大きい爲に壓力に對してかなりの耐力がある。從つて基礎を普通の『カーテンウヲールシステム』に於けるが如く單に柱下のみの壺地形とせず一種の連結せる逆丁字形梁の布地形にするのに適當である。是は建物の下部を、一固體として強度を增すが故に不同沈下等を防ぐ爲に非常に有効である。

是等の理由に依りて見るも、複構造は單構造よりも遙かに理想的のものである。只今日迄の程度に於ては、複構造を非常に輕快に强力に而も簡易に構造する事は非常に困難な業であつた。

殊に地震の虞ある吾國の如きは是を餘りに輕快に造るに於ては地震に對する耐力を非常に憂慮しなければならない。(一)若し是を輕快に造り得ないとすれば、前記の保温、防濕、外觀、配管配線、音響調節、强度等の特長は得らるゝとしても、材料及び勞力の點よりして非常に不經濟のものとなり終るのである。又壁厚を增す事は、床面積を減少する事となつて、使用上甚損失を多からしむる。是等の結果は中空構造を到底使用に堪へざらしむるものとするのである。(二)若し又可成に輕快に構造し得らるゝとしても、その勞力が非常に大きいとなると、是亦結局不經濟のものとなり終つて、特殊の用途以外には

用ひ難いものとなる。故に此中空構造即複構造を今後單構造に代りて建築構造界を支配せしむる爲には

一、如何に輕快に而も強力に構造し得るか

二、如何に簡易に設計し施工し得るか

の二點に係つて居る。之は直に

三、如何に經濟的ならしむるか

といふ事と關聯する。今日の材料の進歩、今日の構造の理論の進歩、今日の構造法に關する諸種の發明及び考案の進歩の三者はこの難關を越ゆるに十分なる準備を作り上げた。

この基礎の上に起つて是を解決する時は、從來殆んど、不可能なるもの、空想に近き理想のもの、とせられて居た、複構造を確實に實現し得べきものたらしむるに到るであらう。

私が敢て複構造が將來の建築構造法であるであらうことを豫言する理由の基礎は實に此處に存するのである。

然し乍らこの複構造は獨り、現代人の獨創的功績だとのみ考へてはならない。『イタリー』に於ては既に紀元六世紀頃に於て『ラベンナ』の『サンピタール』寺院に素燒の陶器による直徑五十尺厚さ僅に一尺の『ドーム』が架せられて居る。又『ペルシャ』に於ては、この頃より『ドーム』及び壁體に屢々中空構造が使用せられた形跡がある。又『ムーア』人の『スペイン』に殘した遺跡にも中空煉瓦が使用せられて居ると記述せられて居る。其他『サラセン』系統の建築には、屢々此の巧妙なる構造法が活用せられて居る樣である。只是等は昔日に於て非常に明晰な頭腦と卓越せる技能を有して居た『サラセン』人等に依りて僅になされたる難構造法であつたが、現代に於ては是を確實なる基礎の上に起てる普遍的なる構造となしたいと思ふのである。

今是等の實例として既に現れかけて居る中空『コンクリートブロック』及び『ホロータイル』に就いて後

章に於て說明することにする。

三　構造法の發達と其種類（構合的○造法への道）

人類が其生活に於ける最も必要なるもの丶一つとして、建築を爲さんが爲に、その智識の限りを盡し經驗の數を重ねて、考案した構造法は實に夥しいものであつたが、是を總括すると、約五種に分ける事が出來る。

然し數千年來眞に優秀なる方法として最も進步せる民族に依りて取扱ひを、繼續せられたる文明的方法は只二種である。

一は石、煉瓦等の小片又は塊を積み重ねる積疊式建築法と、二は木、又は竹類を組合はせる、結構式建築法とである。

此の二つのものは、文明の系統と土地の狀況との二つに依りて、或は一を或は二を、或は一、二を混合して用ひられたものである。然るに近代科學的文明の發達に依つて建築樣造法に一大變化をもたらしむるに至つた。是は即ち鐵及び『セメント』の製法の發見に基づくものである。

優良なる鐵の大量なる製產の結果は鐵を結構式の建築材料として、且つ是を以て積疊式建築法の骨子となして其強度を增さしめたるもの、即ち鐵骨構造建築法の發達を見るに至つた。即ち結構式建築法と積疊式建築法との合成に依る新構造法である。

又一方『セメント』の發達は『コンクリート』の再發見となり續いて優良なる鐵との結合に依つて鐵筋『コンクリート』の發明となつて現れて來た。

此の『コンクリート』及鐵筋『コンクリート』に依る構造法こそは、實に在來の構造法に對して、全く新

たなる構造法であつた。即ち在來ほとんど考へられなかつた鑄造式建築法であつたからである。(ローマでは曾て一部に用ひられた事は歷史的遺物の示す處であるが)

即ち文明的建築法は、在來の結構式建築法及び積疊式建築法の二種に加ふるに鑄造式建築法を以てしたのである。

處が此の第三の若い鑄造式建築法が非常な勢を以て最近四半世紀の間に發達して來たので寧ろ前の說明は次の樣に言うた方が適當でないかと思はれる位である。

卽ち『在來は結構式建築法と積疊式建築法との二種が文明的建築法として存在して居たのであつたのに、突然鑄造式建築法なる、最新建築法が現はれて來て、非常なる勢力を以て、前二者を驅逐して是に代らんとしつゝある』と。

然し如何に優良なる建築法であると言つても、鐵筋『コンクリート』は未だ甚だ若い。結構式建築法や積疊式建築法が幾千年の訓練を經て居るのに比すれば　此の鑄造式建築法は未だ僅かに半世紀間の訓練に過ぎない。それで其構造の方法に於ても、外觀の問題に於ても、幾多の困難が殘されてゐる。是が洗練せられた建築法として大成される迄には、未だ幾多の時日が殘されて居る樣である。

此處に於て吾々が最も深く感ずる處のものは、此の新進の鐵筋『コンクリート』を用ひんが爲に、今日迄幾千年の訓練を經て極度の洗練の域にまで達せられて居る、在來の建築法を盡く捨て去ると言ふ事は甚だ惜む可き事であるといふ事である。吾々は寧ろ斯う考へる。今Hの進んだ要求に向つて十分なる答を爲す建築を爲さんには、單に鐵筋『コンクリート』の新構造法に依らず、是等新舊の三構造法の得失をよく研究しよく比較して、是を最も適當なる方法に依りて結合せしめて、其目的を成就するを以て、最も優れたる方法であると。

卽ち三者の最も特長とする點を以て、他の缺點を補ひつゝ成し遂げらるゝ處の綜合的建築法である。

嘗て思想的に稱へられた事のある處の、採長補短の建築法である。斯くする事に依りて、一方には今迄人類が幾千年の間苦心を重ねて訓練した、古き光榮ある文明の建築法を新しく生かし、他方に於ては、若き優良なる合理的建築法の特長を古き經驗に依つて、最もよく補佐する事が出來たならば、其相互扶助の結果は、最も完全に近きものとして、今日の要求に答へる事が出來るであらう。

即ち自分等は今日の最も優れたる構造法として、此綜合的建築構造法の研究及び實施の必要なる事を主張するものである。綜合的建築構造法が如何に卓越したものになり得るかは、下章に論ずる處の理由に依つて多くの偏見なき有識者の同感を求むる事を得るであらう。

四　鐵筋「コンクリート」建築構造法の得失

前章に述べた如く、鐵筋『コンクリート』に依る建築構造法は、今日迄全く思ひも及ばなかつた鑄造的の新構造法である。是が千八百五十一年『ウィルキンソン』氏に依つて、或は千八百六十二年『モニエー』氏に依つて、發明せられてより、僅かに六七十年の年月をしか經過して居ない。

而も是が大規模に用ひられる樣になつたのは、千九百年の『パリー』の大博覽會以後であるとすれば、其年月は更に減じて僅に廿數年の經驗をしか重ねて居ない。然し今日の非常の進歩した科學的文明の偉大さに於ての二十年は、或は昔日の二百年にも相當してゐるかも知れない程、其科學的方面に於ては、發達の域に進ませられて居る、各種の構造の理論や方法は、幾多の精確なる實驗のもとに、世界的に確立せらるゝ至つた。

然し例へ今日の廿年が昔日の二百年に相當するとは云へ、やはり鐵筋『コンクリート』は若い。幾多の構造上の問題や、衛生上の問題や、美觀上の問題が今後の解決を待ち望みつゝ殘されてゐる。是に就ては屢々鐵筋『コンクリート』建築の書籍等に論ぜられて居る事であるけれど茲に今一度是を、今日の發達

したる文明の建築法の要求に照して批判して見ると、實に次の如くである。

(一)鐵筋『コンクリート』建築の特長

A、耐火的

壁體も、床も屋根も、其結構の部分は盡く不燃質なる『コンクリート』を以て建築せられて居るばかりでなく、鐵筋『コンクリート』は強度の火災に會ふも、其結構を破壞せられる事がないから、ほとんど絶對に耐火的である。(此の事は今日餘りによく知られて居る事である)

B、耐震的

鐵筋『コンクリート』は壁も床も屋根も一つのものとして鑄造せられるのみならず、其各部は力強く且つ非常に彈性が強いから、地震に對して非常に安全である。此の事も亦かなりによく了解せられて居る事である。

C、強力なる事

是は前の地震に對して強いといふ事に依つて十分說明せられる事である。

D、壁面積の減少せられる事

鐵筋『コンクリート』の強力は石煉瓦等の建築に比して遙かに壁面積を減少せしむるに足る。

E、耐久的なる事

鐵筋『コンクリート』は腐蝕しない、依つて幾千年の歲月に耐へ得るであらう事も亦今日に於ては非常によく知られて居る事である。

F、形體の自由なる事

鐵筋『コンクリート』は鑄造する建築であるから、其費用をさへ論せなければ如何なる形體をも構造する事が出來る。是は在來の石造煉瓦造等の遙かに及ばない特長であり、又木造と雖も更に及ばざる事

が多い。此意味に於て形體の自由といふことはかなりに大きな鐵筋『コンクリート』の特長と言へやう

(二)鐵筋『コンクリート』建築の缺點

A、保温

鐵筋『コンクリート』建築に於ては壁をうすき幕壁とし屋根も亦うすき『スラップ』を以て陸屋根に構造する場合が多い斯る場合に於て其幕壁及屋根の『スラップ』のうすき爲に熱の傳導を容易ならしめ、隨つて夏は暑く、冬は寒いといふ缺點がある。

B、防濕

前述の壁厚のうすいといふ事と『コンクリート』の有穴性とは外部よりの濕氣の傳達を完全に防止する事が出來ない。是に加ふるに、冬期に於て室内を暖むる時には壁面の冷たさの爲に、内部壁面に一面の露を生ずる。是亦大いなる缺點である。

C、價格の不廉

鐵筋『コンクリート』は是を煉瓦造や石造に比すればほとんど同價格であつて決して高いとは言へないが、是を木造建築に比すれば甚だ初價格に於て高い、是は鐵筋『コンクリート』建築の普及を困難ならしむる大なる原因を爲すものである。

D、假枠面倒

鐵筋『コンクリート』は鑄造する構造法である爲に、上部を除く凡ての面は盡く假枠の力に依らなければ構造する事が出來ない。其爲に假枠の材料も勞力も時日も、非常に多くを要する。是が鐵筋『コンクリート』構造法を不廉ならしむる直接且つ最大の理由である。

E、外觀の不良

現今の鐵筋コンクリート建築法は、壁は殆んど柱及び梁に依る架構と幕壁とに依る所謂『カーテン

ウォールシステム』であり、床屋根等は同じく梁及小梁『スラップ』に依る構造法で壁と類似の構造法である。従つて建物の外部及び内部又は天井等に於て其『スケルトン』が表れて來る。これはよほど巧妙に取扱はなければ建物の外觀を非常に惡しからしむる。且つ壁の薄い幕壁は建物の外觀を非常に貧弱ならしむること　あたかも痩せ衰へたる動物に於て、其骨格のあらはなる時に受くる印象の如くである。又室内に於ても隅角に柱形が現はれたり、又天井の近くに胴差『ウォールガーダー』が巨大なる廻縁の如く現れたり、天井に大梁小梁が縱横に現れたりする事は、餘程巧なる意匠でない限りに於ては、決して良い感じを與へない。それは室内に餘り強い感じを與へるからである。是等はいやしくも物の美に對して優れたる鋭敏性を有する者の、到底耐へ得ない處のものである。是は鐵筋『コンクリート』構造法建築美に於ける一大難點である。

二、配管配線の困難

鐵筋『コンクリート』構造は薄い幕壁式建築法である爲に其の壁體内に配管配線を爲す事を得ない。處が近代の進んだ文明的設備を爲せる建築に於ては、電燈、電話、呼鈴、上水、下水、煖房、等の約十種に近い線や管が建物の室々に導かれねばならない。若し是が鐵筋『コンクリート』の場合に於て、其壁や床の上に收める事が出來ないとすれば、室内の外觀が非常に傷けられる事は言を俟たない。

G、施行期間の永き事

鐵筋『コンクリート』は鑄造せられる爲に、其硬化する迄、假枠を取除く事が出來ない。其爲に單に此鑄造法に依る時は非常の費用をかけて、特別の裝置を爲す外、其施工期間は常に永くかゝる。是は經濟の方面にかなりの影響を及ぼす處の缺點である。

斯く鐵筋『コンクリート』は一面に於て非常に卓越した特長を持つてゐるけれ共、他面に於ては斯くも多數の缺點を持つてゐるのである。

是を在來の石煉瓦等の建築に比較するならば、其安全さに於て其自由さに於て、遙かに優れた建築構造法である事は勿論であるが、又一方に於て持つてゐる是等の缺點を完全に除去するのでない限り、決して是を現代の文明的要求を悉く滿足せしむる處の優秀なる建築法であるとは、誰も言ひ得ないであらう。鐵筋『コンクリートブロック』の出現の理由は後章に詳說するが如く、實に此鐵筋『コンクリート』の缺點を、如何にして除去す可きかと言ふ、此解決に向つて存在の理由を持つて居るものである。

斯の如く現代の代表的建築構造法である處の鐵筋『コンクリート』建築法が、經濟的にも、衛生的にも亦美觀的にも、斯も多大の缺點を持つて居て、現代の最高の要求を滿足せしむるに甚だ不十分であるとしたならば、是を改善して十分に現代の要求を滿足せしむる建築法たらしむる事は、現代に建築家として職を奉じて居る者の解決しなければならぬ最大なる且つ最急なる事を誰も痛感せられるであらう。

五、中空構造としての「コンクリートブロック」及び「ホロータイル」の發達

A 『コンクリートブロック』の發生の理由

既に、前章に於て中空構造論(複△造論)として、是等の優良なる建築方法が此文明の時代の口造法として必ずや現れて來るであらう事を說いて置いた。是は本章に於て論ずる處の『コンクリート、ブロック』及び『ホロー、タイル』の出現に依り、甚だ良き傾向を示しつゝある。

『コンクリート、ブロック』及び『ホロー、タイル』の發達は最近僅か三十年間の事に過ぎないが、その目覺ましい發達は、非常なる注意を傾倒せらるべき資格がある。『アメリカ』の或る『ホロー、タイル』に關する著書の如きも、其序文に『ホロータイル』の建築は實に『ツモロー』の建築法であると論じてゐる。

程である。私は先づ『コンクリート、ブロック』に就てそれが如何なる要求に應じて、如何なる風に發達したかに就いて、概念を話して行く事とし『ホロータイル』の事は後に僅に附加するに止める。

千八百二十四年英國の一左官職『ジョセフアスプヂン』に依つて、今日の優良なる『ポルトランドセメント』製造法が發明せらるゝや、此の優良なる膠着材の力に依つて建築界は非常なる發達を來たさせられた。第一には石煉瓦等の積疊式建築法が此の有力なる膠着材に依つて非常なる安全さを保證せらるゝに至つた事である。第二にはかつて『ローマ』時代に用ひられた事はあつたけれど、其後全く忘れはてられてゐた『コンクート』の再發見となつて、現れて來た事である、つまり此の『コンクリート』(即ち人造石)の出現は、實に構造界に大なる影響を與へたそれは建物の基礎、或は床等に繼目なき石としての働きをなさしめ得るからである。第三には此の『コンクリート』の出現が優良なる鐵と結び付いて、鐵筋『コンクリート』の發明となつて現れて來てすさまじい勢で建築構造界を改革しつゝある事は、前章に述べた如くである。第四には此の『コンクリート』に依つて『コンクリート、ブロック』なるものが出現して來たこの第三及び第四の鐵筋『コンクリート』と『コンクリート、ブロック』とは實に『コンクリート』なる母體より生れ出た處の二つの新生である。

今この新生『コンクリート、ブロック』に就いての考察を進める事とする。

『コンクリート、ブロック』が『コンクリート』より生れ出て一歩を踏み出したその分岐點は、人造石としての石材的用途を完全ならしめんとした事にある。是を詳しく述べるならば、石材は其産地が制限せられて居る爲め、(一)其場所に於て大きな一個體となつて居るものだから、小さな一塊にして切り出さなければならない(二)次に是を所用の場所に運搬しなければならない。(三)更に之を所要の大きさに正確に刻まなければならない。是等の三つを爲す爲めには可成りの勞力と時日とを要する。石造建築が多くの場合甚だ高價であつたのは是に原因する。此の石造の不便不經濟の何等かの代用の方法によつて免

れ様とする企は既に早く數千年前に於て煉瓦を以つてなされた。(この煉瓦の母胎からは『ホロータイル』及び『テラカッタ』が生れ出た。)一方最近に此の『コンクリート』の出現に依つて同じく此の石を經濟的に代用せんとした物が即ち『コンクリート、ブロック』である。

即ち煉瓦と『コンクリート、ブロック』とは全く同じ目的を以て同じ道を歩いて居る二つのものである是を石の代用品として第一次の進化と見る。

次に、煉瓦から『ホロータイル』や『テラカッタ』が現れたといふ事と『コンクリート、ブロック』が單なる塊より中空『コンクリートブロック』へ進んだといふ事は全く同樣の過程である。即是を共に石の代用品としての第二次の進化と見る事が出來る。

上述の理由で明かである如く『コンクリート、ブロック』が最初に石の代用品たらんとして現れた時は(イ)石が原產地から切り出される事(ロ)過搬される事(ハ)猶使用場所に於て正確に刻まれる事の三つの代りに『コンクリート、ブロック』は比較的近くから材料が集められて僅に一定の形の中で鑄込まれるといふ丈の勞力である爲に、其値は殆んど石の半にも達しないで濟むといふ事が第一の理由であつたのだが、第二に斯く簡單に石の代用品が鑄造的に得られるとすれば、同じく鑄造せられるものならば、今一步進めて其塊の中に中空を設ける事としたならば材料は更に輕減せられ、從て基礎も輕減せられるであらうといふ事から『ブロック』内に中空が設けられる事になつたのである。第三には斯うして中空を設ける事が、偶々自體の材料輕減や基礎の輕減ばかりでなく、此の中空あるが爲に保温及防濕の効果を、非常に偉大ならしむる結果を得たといふ事である。即ち曩に述べた中空構造論の理想の一部を完全に達せしめ得るといふ事である。是が『コンクリートブロック』をして、非常に急速なる發達の途に就かしめた理由の一つである。第四には少い材料を以て厚く見せるといふ事は、やはり前に中空構造論に於て述べて置いた事である。此の事も非常に都合よく『コンクリート、ブロック』に依つて達しさせる事が出來る

第五には又更に、配管配線の問題も其或物に依つては、可成りに良く解決する事が出來るといふ事である。斯ういうて來ると曩に中空構造論に於て述べた事は、殆んど悉く『コンクリート、ブロック』に依つて達せられるのであるが、唯一つだけ、最も大切なものに於て其理想に遠い處がある。夫は非常に强力なるものを得る事が出來ないといふ缺點である。是あるが爲に『コンクリートブロック』は前述の中空構造論の理想を悉く完全に滿足せしめて居るとは云へないのであるが、然し此の一つの缺點はあるとは言ひ乍ら、前述の四つの特長は建築構造の上に於て偉大なる進歩でなければならない。それで此の經濟と衛生と美との三大要素に向つて完全なる答を爲す事が出來るそして餘り多く力の問題に觸れない、例へば住宅の樣な種類の建築構造に向つて、非常な勢を以つて普及し始める事になつた。英國の如きでは彼の有名な勞働者住宅法案に依る住宅は勿論、其の誇とする田園都市の住宅建築の大半は、是等『コンクリート、ブロック』に依つてなされて居る事が、月々の『コンクリート』の雜誌に依つて、絶間なく報告され紹介されて居る程である。（つゞく）

日も暮れぬ人も歸へりぬ山里は

峰の嵐の音ばかりして



建築藝術に於ける歴史の問題(一)

山崎萬壽夫

流動が始まつたときに歴史が始り、それが終ると歴史も終るものである。

人間の行爲である歴史は、何時しか漠然として地上に起つた。彼のその最初に於てなされた、人間の行爲は何であつたらう。私の考へて居る處が誤つてゐなかつたら、その最初は自己の生命を保つための食を求めることと、その身體を護るための住居(?)を欲することである。

漠然として起つたこの歴史の源泉は、直ちに流れとなつて様々の水路を作り、集合的行動の無數

の支流によつて培はれて、未だ開かれない將來の霞の內へ洋々として流れてゆく。それは神意がこの世に實現されてゆく過程である。

實に神の立場から云へば、この宇宙（コスモス）は神の藝術であり、その歷史も全體として神の藝術である。然し、吾人が常に稱する藝術とは、それが人間の作であることを意味してゐる。即ちこの神の偉大なる藝術のコスモスにあつて、人間が作る小宇宙が、その人間の藝術なのである。それは人間の持つてゐる力の、美しい綜合であり交響である。人間は斯る力を自分自身で持つてゐる以上は、その力を出來るだけ純粹に、完全に、發揮しやうとする要求を持つてゐる。單なる物質的充足のみでは盡されない、より高次的な精神的方面の背景は、次第に美しい光に映出されて、創造を生命とする藝術が、かくて、凡ての物に情ありとみる、靜觀の上に發芽したのであつた。何等自己の立場に立たず、物に情ありとみるのは之を生あるものとして新に創造することであり、美とみることである。美とは即ち全體である。その特異なる價値——美價値を求めて、藝術はその文化の歷史に重要なる位置を占める。

文化の歷史は、行動の歷史と等しく爭鬪の物語りと言へる。文化は趣味、生活程度及技術を包含して、その歷史以前にあつては、模索したり、試みたりして、樣々な困難に遭遇して、その萠芽をみた。そして、その成長が始まるや否や本能、習慣、趣味、感情及び種々なる利害は『その過去』を史上に主張した。實驗的衝動、清淨、便宜、安樂、健康、進取性、繁榮性等は『その將來』と『現在のため』に抗辯する。斯くして、歷史はその兩者が互に殘存しやうとする、事業の權利のための戰の發展とも考へられる。

こゝに於て、吾人は少時く吾國を顧る。

『僅か一日餘りの航海で、吾々が日本に來る時如何に異つた光景が視野に入るであらう。自然は尨大な大陸から、可憐な島國へと移るのである、濁る河はすみ、灰色の峯は綠の丘に變る。自然に起伏する線は穩かとなり、野邊は園生のやうに花に飾られてゐる。波の音は汀に咽き、微風は松の

梢に歌つてゐる。空氣は濕り土は柔かく、氣候は温和である。國は海に守られ、自然は人情を柔げてゐる。どうして、歴史はかゝる還境にあつて、苦痛の歴史であり得よう。民族は外冦の虞れなくその皇統を長く續けた。恐怖なき民族には、此孤島は一つの樂園であつた。

生活は餘裕をもち、人は情趣に耽つてゐる。この國に於てほど、嗜好に時間を樂しむだ類例は他にないであらう。力とか重さとか幅さとか、人は斯るものを要する機緣をもたない。美しさと樂しさと優しさとが、彼等の心に溢れてゐる。激しい自然に抗する力に、彼等の生命があつたのではない。柔かな靜かな自然に從ふのが、彼等の生活であつた』實に柳氏の斯く言はるゝ吾國は、そこに情趣の藝術をもつてゐた。

既に長い年月をこの國土に送つて、島國の親しむべく愛すべき自然の影響を享けた吾人の祖先は豊饒な農産物を惠まれて、その食養から、體質をも心理的素質をも、淡白な意欲、刹那的にのみ烈しい感情といふやうに規定され、ひいて衝動が温和になり、願望が調和的になつたと考へられる。故にその反面に於ては、強烈な幻想や、ねばり強い意力等は生成されなかつたけれど、輕い柔かな優しい幾何學的線の快よさを鋭敏に感受する心が培はれてゐたことは疑はれない。大和や河内の古い草葺の農家の姿は、いまに、それを虔ましく物語つてゐる。

何れの國に於ても同樣であるやうに、人間の最初の行爲は、自らの生命をつなぐ食物と、その身體の安全を求める本能による活動に始まる。洞穴や石柱に起つた身體の庇護所は、最も低い、建築の藝術的價値の發現である住居に遷り、茲に藝術の搖籃時代が、微かな光に照し出されたのである。

それより以後、吾國に於ては二千五百八十有年の永い間、その藝術——特に建築の發達史は、時には燦然として輝き、時には沈滯し惰落し、各の時代に於ける國民生活の心の動きの基音に和して正直なリズムを表現してゐたのである。

かくみれば歴史はまた一種の大なる樂劇であるそしてその登場人員である吾人は、この樂劇で

ある歴史を離れては生活することが出來ないのである。吾人のあらゆる努力や活動は、何等かの意味又は範圍で、歴史に於て或は歴史をなしつゝ行はれるのである。

こゝに於て吾人は、個人の意義を知り、自己を顧て歴史のその尊重すべき使命と舞臺に就かなければならない。

一般に人類の生活には、自然的、本能的要求に基く欲望價値の充足の方面と、理性的、自由意思的要求に基く、理想價値を意識する生活の二方面を有してゐる。しかし、茲に論じやうとするものは、後者即ち個人的價値完成に就てゞある。

然らば、その個人的價値完成とは何を意味するか。云ふ迄もなく各人が有してゐる、すべての天賦の才能を、出來る限り充分に完全に發揮することである。即ち個人的價値完成は、それよりもより大なる價値——文化價値に依存してのみ、渾然たる個人の價値完成が期待されるのである。それが個人として內的に意識するところのものとしては、人格的價値の完成として現はれるのであるが然し、それを他方よりみれば、自己の對象となる客觀的事象の全價値を、出來る限り充分に自己の內心に反映せしむることである。

從つて、斯る生活にあつては、個人は各自身に於て一の統一を有するが故に、その統一を通じて宇宙の諸象を觀察するを以て、如何なる表現も主觀なる人格的色彩を有することを常とする。かくて、その統一がより完全の域に接近すればする程愈その人は個人としての自覺を明確にすることが出來るのである。從つて斯る人こそ、最も生存の價値を有する人と云ひ得るのであり、假令その人の働く分野が如何なる方面であらうと、その價値實現には變りがないのである。藝術の分野でも、宗教政治等の分野でも、その外如何なる分野に於ても高次的なる價値の光は君臨するのである。しかし本稿に於ては、藝術の分野にある建築家の『人』に論を及ぼしてゆく。

云ふまでもなく、全然個人を無視して社會の成立を許容することが出來ないやうに、社會を離れて個人の存在は考へられないのである。實に個々の生活は、社會に於て且つ社會によつて、始めて成立することが出來るのである。故に社會を離れて個人は生存し得ない。個人對社會の問題は、こゝにその緒を見出すのである。



震災と都市問題雜觀（一）

楠原祖一郎

はしがき

私は此の雜記を綴るに就て這ふ云ふ事を考へました。それは一つの組織を有せしむるでもなく又何物かを結論するでもなく、只今度の震災に鑑みて都市當面の問題なり、又必然的に起つて來る問題なりに就て、水の流るゝ樣に一つの流れを辿つて、其の問題を考へて行く所に、又或る面白味があるのではなからうかと。

そこでそれに就て考へて見た所が、それの方が深刻な表現を爲し得ると考へましたから、以つて其の文章は體系とか、結論を有しない、首尾共にない所の變挺な文章であります。即ち文章の節そのものに、結論があるのでありまして、政策論と云ふ樣なものがないのであります。そのつもりで讀むで下さい。

道路問題

一路幅の問題

今度の東京、横濱の震災に依つて見ますと、どうも今日の程度の計畫での都市政策は、先づ道路の方面から云ひますと、全然それを立直さねばならぬと思ひます。日本の市街の道路は、兩側の建物の高さ、又は其の附近に住むである人口の濃度等に比例して割出されたものでなくて、或る一部

分の考へとしか云へない交通量等が、道路を改良する一つのスタンダードになつて居ります。私共の考へでは、交通量に依つてのみ路幅を決定すると云ふのは、片手落であると思ひます。勿論交通量も大切でありますが、其の道路の附近の人口状態なり、建物の實情を交通量よりも、重く見なければならぬと思ひます。それでないと、若し或る事態が醸されて、ある人々が凡べて道路へ集中するとなると、人口の稀薄な部分ではそうでもないが、密集狀態の所では忽ち非常な混亂に陷らざるを得ませぬ、殊に日本の道路は、電車道、牛馬道歩道とまだ區別のない所が多いのですから、其時の事を思ふと實に寒心に堪へませぬ。

ブラッセルの市街は、實に行き屆いたもので、住心地のよい町だと云ひます。それは此の市の富が比例的に云ひますと、世界一の紐育よりも勝つてゐるそうで、這ふした條件が卽ち市街の建物や道路の方面にもよい結果を齎すものと考へられますが、此のブラッセルの大通りの一つのアヴニユウ、ルイズの往來は、綠のトンネルが二列を爲して居つて、何れのブウルバールも大道は五つに分れてゐるが、其の兩端の煉瓦道は又各々二つに分れて、電車道とサイドヲークの二つに分れて居ります。中央の道は木材を縱に積載した、オウトバイの道に當てられ、而して中央道の兩側は、又廣い土の路となり、此路々に廣い幅で各々二列に樹木が植へられて、綠葉のトンネルを造つてゐるのであります。此の圖の道がプロナードとなつてゐるのでありまして、此のアヴニユウルイズの一本のストリートだけでも都合七筋に分れて居るのでありますから、餘程其の往來が激しかつても、角々でなければ決して混雜などするものでなく、一人の交通巡査の整理でgo,stopが行はるゝのであります。此の樣に幅の廣い綠のトンネルが二筋も並んでゐると、只に都市其のものに美觀を與へるものでなく、これが一朝有事の場合に非常に役立つ事は今度の震災でも實證されて居りますから、明說を要せぬ事と思ひます。

要するに路幅の問題は、是れは實際上の問題でありまするから、議論で決定すべきものではあり

ませぬ。されば他都市の實情等に鑑みて、比較的に決定さるべきものと考へます。紙の上に地圖を畫いて決定した道路の幅は、實際市街に出て見て考へ直ほす事が必要でありますまいか。

二、補裝問題

次に道路の補裝問題であります。今度の震災に依りますと、アスファルト、タークレー等が、火災に依る強度の爲めに、自壞作用を起し、或る部分では、避難せんとする人々の足の裏に粘着したと聞きましたが、是れは體驗した事ではありませぬから、私は何とも申す事が出來ませぬが、アスファルトやタークレーは熱に對しては可溶體でありますから眞實と思ひます。それよりも驚いたのは、木煉瓦の補裝路の事であります。私の見た所に依ると、木道は火の爲めに燒けて凹みが生じてゐるのであります。安全地帶の白煉瓦は、足で踏むとバリバリと云つて割れる狀態であります。是れは火事の爲めに非常に溫度が上騰した結果であらうと思ひますが。此の問題はそうした場合の事をも考へねばならぬと思ひます。道路の補裝問題は、平時の場合に於ては、質の問題に止まつてゐますが、此樣な非常狀態には其の可否が問題となりはせぬかと考へます。

ブラッセルの町は、前申した樣に贅澤な程美しい町で別名小巴里と云ひますが、裏通りの美しさは巴里以上だと云ふ事です。此の町では如何なる場合でも石や煉瓦で道が補裝されてゐるので、非常に足を傷め易いそうです。現に茲の町の人々に跛者が非常に多い樣です。是れは主として、堅い靴を穿いて堅い石の道を歩くものだから足が直ぐ傷むだそうです。そうした積年の傷みが、遂ひに人の足の健康を奪ふものだと考へますが、實際此の町の人々は、土の路を少しでも歩きたいと云ふのが一つの大きな懇望だそうです。

這ふ云ふと、日本の人々はブラッセルの人々は大變贅澤な我儘物だと思ふでしよう。現に日本では巨額の費用を投じて、都市計畫を行ふてゐる町大阪の如きは日夜土の道を無くする爲めに、何百人かの人と何程かの機械とが動いてゐるのではあ

りませぬか、西と東と國こそ變つてゐるが、一本の道の問題に就いて双方にこんな相違があらうとは、嘘の様な眞實の話です。這ふして平時の場合には、好いとか悪いとかゞ問題になりますが、一朝今度の様な大きな問題が起ると、補裝問題も考へさせられます。土の道なれば傷も無かつたろうに、補裝路であつたが爲めに斃れた人もあるでしよう。又其の反對の結果もあるでしよう。が然しそれも要するに私の考へでは質の問題に止まると思ひます。日本の大きな各都會で、道路の隅から隅まで、木や石や、煉瓦で補裝した道が出來上り長い間此の道を歩く人は、跛者にもなる人が出て來るでしようし、又一度でもよい、土の道を歩きたいと云ふ希望を有つ人もある様になるかも知れませぬ。吾々も今の中にウンと力を入れて土の道を歩く事です。それは笑話の様な眞實の話です。

三　道路の機能

日本では、東京でも(震災以前)大阪でも其の道路の伸び方は、一寸妙な伸び方をしてゐます。私はプランナーではありませぬから詳しくは判りませぬが、道路計畫の大綱は、先づ市のセンターを造つて後、それをセントラルポイントとして、市の郊外に通ずる少くとも八條以上の放射直線路が設けられる。そしてそれを環狀路線に依つて連絡する。これが出來ると、補助路線を蜘蛛の巢の様に張る。是れは技術家でなくとも、都市問題を考へてゐる人ならば、考へ得る事でありますが、然しそれは地圖ではなくて、實際に道路を布くのですから、位置、方間路幅等凡べて技術的見地に基いて決定さるべき要素に多い様であります。

是れは主として、道路の機能を如何にすれば、合理的に發揮せしむる事が出來るか、を決定する事が必要な因素となるのであります。一本の道路の向け方が悪い爲めに、其の道路に面する人々の損害は、長い期間に積ると、可成りな額になります。

巴里の放射路線は、都市計畫の根本問題たる放射路線決定のモデルであります。巴里の地は、殆んど平面だから斯く都合好く計畫出來たのでしよ

うか、直線と云つてよい様に伸びてゐる、此の伸び方であると、往來の整理さへつけば、市のセンターに激變が起つても、人々を直ちに市郊外に搬出する事が出來ます。是れが東京や大阪の様に（今の所まだ放射線もないが）曲つた計畫の線路が所謂放射線だとすると、シビックセンターに激變があつた場合、之れを市郊外に搬出するには、大變な時間と、大變な勞力とを、要し又それだけ危險率が增大されるのであります。

都市計畫と云ふのは、一口に申せば、市民生活から危險と云ふ文字を無くするにあると思ひます即ち危險と云ふ文字を無くする程、危險と云ふ觀念を稀薄ならしむるに在るのであります。それが危險の被る様な計畫では市民は困ります。道路の機能がよいか悪いかに依つて人の生命まで左右されるのでありますから、是れはよほど愼重に考へて貰はねばならぬ事と思ひます。

道路の問題で未だ書き度い事は澤山ありますが是れ位にして置きましよう。

今日もまた
花まつほどの
慰めに
ながめくらしつ
峯のしら雲

田園都市への理解

別所悌一

理解は計畫の一步手前の世界である。各國に於ける田園都市の計畫の發表は、も早や私達にとつては決して極く新しい話題でない。田園都市への理解の時代は、も早や私達からも過ぎ去つてしまはうとしてゐるかも知れない。單なる淺い流行語としての田園都市ではなく、確かな實行問題としての田園都市が、眞面目に考査計畫されていゝ時代は、今、極く靜かにではあるが、私達の目前へも來てゐるらしく想はれる。當然動かなければならないものは、どう言つたつて、いつかは動くべき方へ、少しづゝでも動いてゆく。こゝに今更らしくこの理解に就いて記くのは、貪しい自らの心覺えのためなのである。一言で言つて、來たるべき時代の新しい都市、來たるべき時代の新しい田園を、私は田園都市と呼ぶ。

多分、煉瓦を無下に高く積み重ねることのみが都市の利便への正しき發達の謂ではなく、大理石を派手やかに並べ廣げることのみが都市を藝術的に美しく完成させる所以ではないであらう。ニユウヨオクの摸倣への道は、古代ギリシア、ロオマの都市の摸倣への道と倶に、多分、私達をして都市への正しき理解を誤まらせるであらう。都市は、決して、過剩な物資の亂積された取引場でもなく充ち餘つた黃金と肉とのきらびやかな演舞場でもない筈である。都市は、決して、私達の虛榮心の卑しい滿足を得たいために建設された靈魂の賭博場でもなく、肉のみに役立たせるための貨幣と製產品のみの倉庫でもある筈がない。都市は、決して、生存競爭なる迷信に愚かしく有頂天になつた拜金宗徒が、黃金と呼ばれる醜惡なる偶像への歸依から、恣に兄弟相互の靈魂を虐げ傷け殺し合つていゝと大目に許されたる、荒涼たる野戰場では

あらぬ。私達は相殺し相傷け合ふために都市へ急いではならぬ。私達は病菌と失意と打算とマンネリズムとを得るために都市まで出かける要はない私達は相奪ひ合ふためにのみ物資を都市へ集積してはならぬ。極論すれば、都市は、決して、物資の集散市場である筈はない。都市に於ける私達の生活が、單に取引の生活、競爭の生活であつてはならないのと同樣である。私達が單に所謂生存競爭のためにのみ、自ら都市へ集中するとの意見は多分、唯物觀に毒されたる者の哀れな笑ふべき偏見であらう。私達の都市への集中の根本意は、決して、兄弟相傷け合はうとの冷たい企圖ではなく同胞相睦み合はうとの温かい情意なのである。又常識的に誤認されてゐるやうに、都市のみが、決して、眞の健全なる文化の母胎ではあらぬ。菜園や花園を有たない住宅は、單なる冷たい空倉と同然視される時代が、多分、遠からずして來るであらう。都市のみが所謂快樂の切賣場であつてはならぬ。地獄への途中にある歪められたる快樂のみが眞の愉樂ではない。都市は燒けて赤く血塗られ一見私達の目と情慾を曳かうする强激なる魅力を充分に有つてはゐるが、靈魂を永劫に愛もて抱擁しやうとのやはらかな綠の野を有たず、いこひの水濱を有たない。都市はそのけばけばしい氣障な文化の假面で、所謂世間知らずの田舍者を壓倒する。都市の上方は蒼空ではない。都市は蒼空の繼兒である。蒼空を有たずして、私達はその靈魂を健全なる世界で哺むことは能きぬ。都市は情感を强要する。都市は私達を惡の香料を以つて麻醉させる。都市に醱酵した惡は極めて地獄的のものである。從つて、都市に生長した美も蒼ざめ歪む。都市に生れた詩人はヒポコンデリアと靈魂の錯覺とを詩ふ。もしこのまゝの時代の推移を見るなら現在の都市は遂に都市病患者の病院となり下がる外はないであらう。こゝに言ふ都市病とは、黃金と我利と鐵と打算とに依つて腐敗されたる靈魂の不治者の謂である。私達をして、正しく人として生活し思考せしめよ。不快を購はうとて、私達は都市を建てたのではなかつた筈である。現在の都市のこのまゝの發達は、この故に、私の採らない

ものである。

現在の都市が眞に都市と呼ばるるに價しないと同じやうに、現在の田園が又そのまゝ本來の田園と呼ばれてはならぬ。田園は都市が決して所謂生存競爭の野戰場ではないやうに、都市の生活に破れたる者の逃避場ではない筈である。田園は靈魂の救安所としてのみ有在してゐる筈はあらぬ。都市が文化の心臟であり乍ら、田園は非文化の塵箱であつていゝのではない。都市としての誇示を有つていゝとすれば、田園は田園としての主張を有つべきであらう。田園は、決して、眠らず、死んではゐない。都市のみが文化の展覽會場ではなく田園にも展覽すべき文化が有る筈である。都市は田園を蔑視することに依つて敵視され、田園は都市を敵視することに依つて蔑視される。田園は醜く都市の前に卑下する要はあらぬ。而も、田園とは、粗野と固陋とごぶの惡臭との蓄積場ではない筈である。所謂馬鹿になるためにのみ、私達は田園へ引き歸す要はあらぬ。不便と非衛生とを田園なるが故に宥してはならぬ。例へば、ココア一鑑を得たいためには往復一時間以上の距離を大都市まで出なければならなかつたり、至急の病人を醫者の來る數時間後まで慘らしく病床の上に反轉させて置くやうではならない筈である。而もそのうえ、青年會や處女會のみが、田園に於ける精神的な慰安向上の殆んど唯一の機關であることは、確かに怖ろしいことである。圖書舘もなく公會堂もなく音樂團一つをも有たないことが、田園として許されていゝ狀態ではあらぬ。粗野沒趣味無敎養が田園本來の相であつてはならぬ。現在の田園の詩人は糞尿の香ひと陋習とをその詩集に盛つてそれを粧はぬ田園の美として誇示する。鄉土とは糞尿の香ひと陋習との世界ではない筈である。都市人はその糞尿くさく粗野固陋なる故に田園人と笑ひ、田園人はその銅臭にみち我利狡獪なる故に都市人を笑ふ。都市と田園とは、元來、仲のわるい隣國同志であつていゝ筈はなく、死ぬ程の愛人同志であるべき筈のものである。而も、田園の都市化がそのまゝ田園の健全なる發達への道ではないのと同樣、現在の田園を現在のまゝに守ること

のみが、田園の美を護り、田園を田園として素直に生長せしめる所以ではないであらうか。

かうして、も早や、私達は現在の都市に厭き足り、又現在の田園にも厭き足りない等である。而も、今こゝに言ふ田園都市とは、所謂紐雜に作りあげられた郊外住宅地の謂ではない。田園都市の眞の理想は、現在の都市ならぬ亂れた都市を田園へうつし建てゝ、美はしい自然を亂す意味の計畫のうえにはなく、又現在の田園ならぬ汚れた田園を都市へうつし交へて、そろはぬ都市を一層掻き廻す企圖のうゑにもあらぬ。所謂田舍じみたる町なるものが、將來さるべき田園都市ではない。田園都市には、醜い糞尿車が美々しく粧はれた百呎幅の大道を白晝通過してもいゝと言はれてはならぬ田園都市とは、又、都市人の亂れて歩く空想の花園でもなく、田園人のもの珍らしげに歩く空想の歡樂境でもあらぬ。

現在の都市及び田園は、その保健設備に就いては、倶に哀しく失敗してゐるらしく想はれる。來るべき時代の田園都市にては、先づ何よりもこの失敗を愚かしく再びせないために、極端にまで周到な用意と研究とが必要であらう。田園都市には必要以上に清潔で贅澤な所謂有產階級地域も必要ではなく、暗く慘めで不潔な所謂貧民部落もあつてはならぬ。太陽も空氣も、決して、誰の專有物でもあらぬ。所謂貧民部落をよし事情に依つて是認するとしても、その部落者のみが獨り暗らいどぶ川の横町に住んでも、充分健康であり得るとの保證はどこにもあらぬ。而も、町立の病院を建て並べることのみが、或は組合立の衞生試驗所を建て增すことのみが、田園都市を健康地帶へと導く所以ではない。設備は單なる机上空しい論議でもなく、單なる見せかけの形式であつてもならぬ。所謂表面を田園都市らしく薄く裝ふことが田園都市の完成ではない。何よりも先づ、飲料水の問題や糞尿な問題等を賢く科學的に解決し、處理さるべきであらう。例へば、田園の自然のまゝなる清い流れはそのまゝ美はしく保有し、汚れたるどぶを完全なる下水道として處理しなければならないものである。

田園都市は、又、科學的なる利便を考慮に入れないで、決して、成功しやうもあらぬ。現在の多くの都市の如く、自働車馬車等の利用が、反つてその交通を繁雜不便にするやうであつてもならないのは勿論ではあるが、現在の殆んどの都市の如く、小型の自働車一臺をすら自由に走らせ得ない程の小道しか有たないといふ狀態にも、多分、考慮の餘地はあらう。交通狀態の極く僅かな如何がその文化に如何に激しく影響するかは、殆んど想像の外である。汽車汽船電車等の線路航路停車場碇泊場等の配置の、充分よろしきを得なければならないのは言ふまでもないことである。不便なるが故に所謂その俗化をまぬがれ、輕うじてその本來の美と清閑とを保ちつゝある狀態は、決して、その田園としての誇りではなくて、多分、その反對なのであらう。利便はどこまでも利便であつて決して、わるくはなく、例へば、單なる一停車場のためにその美を飲まれ掻き亂されつくすが如き狹小なる自然の美は、停車場なくしても早晩打ち崩され果つべき美なのである。汽車は所謂實用の發達と俱にどこまでも美しく生長すべきものであり、汽船の美觀が所謂實用のために虐げられていゝ理由はない。

田園都市の問題には、又、美の問題を考慮に入れずして望むことは能きぬ。現在の都市のあくどき殺風景、現在の田園の無愛想な沒趣味等は、俱に田園都市には採らないところである。建築の配置にしても其建築自體にしても、俱に、美を無視して田園都市に建ち並ぶことは能きぬ。杜の大木を無下に切り倒してそこにビイルの工場を建てる要はないであらう。曲つて情のある杜の小徑を廣く一直線に切り開いて、そこに醜い輕便鐵道を急いで敷く要もないであらう。池に沿ひ小丘を副ふた青草の道をまで、煉瓦で疊め石で疊むことが、田園都市を美しく利便にする所以とは考へられぬ。雅趣ある木橋や土橋を、唯ひたすら露骨で嚴丈な鐵橋にのみ作り改める要もないであらう。例へば、照明の問題一つにしても、單なる利便のみが照明の充分なる効果を擧げ得るものではあらぬ。美は利便と敵同志ではない。白晝太陽の下に明る

く美しい田園都市をして、夜間燈火の下にも亦輝やかしくうるはしい田園都市たらしめよ。

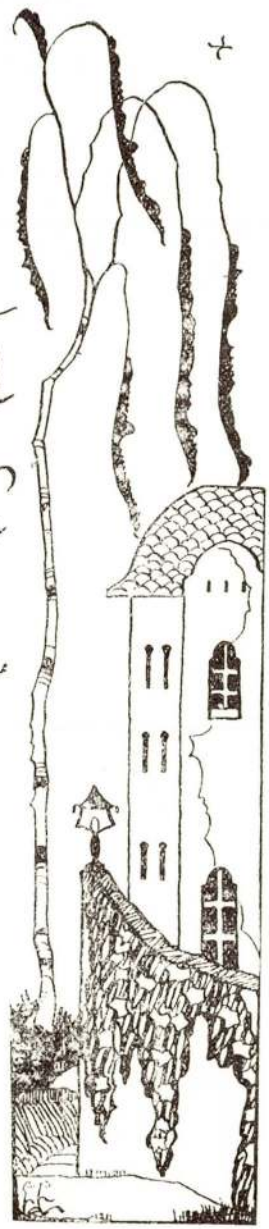
田園都市への理解は、故に、來たるべき時代の新しき都市を理解し、來たるべき時代の新しき田園を理解することからのみ出發する。土を愛し、太陽を愛し、草の花を愛し、さゝやかな流れを愛し、杜を愛し、平原を愛し、眞に、自然の大きい靈魂とその呼吸とに親しく觸れることから出發する。自然は、その懷へ自ら飛び込んで來る者のみを限りなく愛撫して抱だく。ピアノをたゝくことのみに慣れて砂を握ることを避け、舞踏場の狂亂のみに就いて野天のピクニクの愉樂を愛せず、溫室に蘭のみを培うて野生の向日葵を顧みずして、田園都市への親しき理解をもつことは、希つても能きないであらう。時として急行車に乘じ、又時としては數哩の小徑を徒歩しやうとの氣持なくして、田園都市に住む資格ないであらう。田園都市は自由人の樂園であつて、固陋家の世界ではあらぬ。

現在の都市をしてその本來の都市としての姿に解放し、その發達を都市自らの自由なる生長に委ねよ。現在の田園をしてその本來の田園としての姿に解放し、その發達を田園自らの自由なる生長に委ねよ。かくして發達したる都市と田園とは、多分、一見奇怪にも二つ乍ら同じものとなるであらう。都市と田園とは、その理想としては、本來二つの異りたる狀態の謂であつてはならぬ。この意味に於いて、來たるべき時代の新しい都市、來たるべき時代の新しい田園を倶に來るべき田園都市と呼ぶは不當ではない。田園都市とは、所謂都市と所謂田園との、統一完成されたる樂園の謂である。

× × ×

大阪府知事新官邸に就いて

澤原隆夫



目下新築中の知事官邸工事の大要を、申述べて見たいと思ひます、御承知の通り官邸は、私邸とは異り公用にも使用されます、從つて建物全體としては硬過ぐる嫌もありますが、大體に於て住宅氣分を濃厚ならしめる樣に勉めました。

洋館は鐵筋コンクリート二階建で煉瓦のカーテンウオールであります、外部仕上は腰廻ストーンブロック壁地はロックスタッコ及タイル張であります、內壁は腰羽目、紙張、漆喰等でありまして床は寄木張、リノリウム敷、フローリングブロック並にモザイックタイル等になつてゐます、屋根は天然スレート葺であります。

先づ表門を這入り、吹抜の車寄に自動車を止めると致しませう、此處には前面に手摺付の花臺を設け、四季の盛花が此手摺に絡まり付いてゐて主客共に此清き花に依つて、送迎を受ける樣に致し

ました、此處の控釦を押して玄關に這入り案内を乞ひますと、表階段と階段上のステインドグラスに依つて飾られてあるホールに入ります、ホールより應接室、控室、食堂、並に書生室に這入れます、應接室は東、南、北の三方に面してゐて南にはベランダーがついてゐて其前には藤棚もあります、此ベランダーには車寄と同樣に手摺付の花臺があります、夏の夕暮れ涼風に吹かれ、冬の暖かき日に椅子を持出して、庭を眺めるのも亦一入だと思ひます。

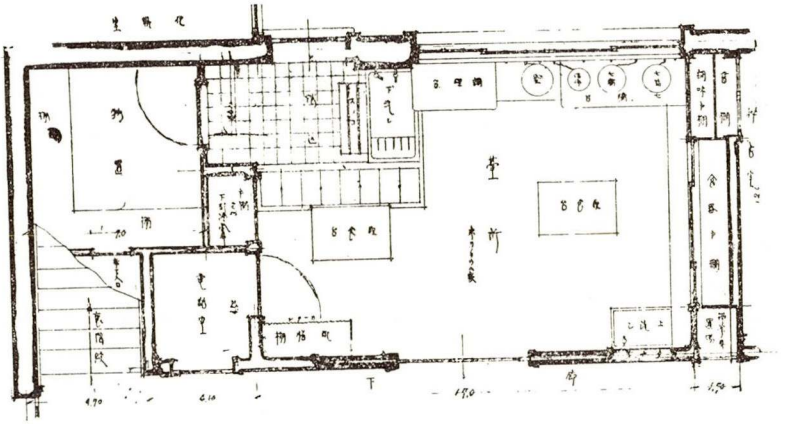
表階段を昇り階上に行きますと、正面が客室になつてゐます、此室は主として小會議室になるだらうと思ひます、左が書齋になつてゐます、此室は階下應接室と同樣な向で南面にはバルコニーがついてゐて至極氣持のよい室であります、其他居室、寢室、浴室、厠等を夫々配列しました。

裏階段を降りますと內玄關に出でます、此處は日本室に至る廊下に接してゐます、前面が食堂となります、此食堂は長さ三十一尺餘りの細長い室であつて一方に於て食卓を圍み、一方ストーブの方では、冬の夜長にソファーに凭れ家族の談話室にもなります、又前申述た如く細長き故多數の來客にも差支無い樣に思はれます、サイドボードは鐵筋柱を包む木造間仕切の懷を利用し之に入れ込み廊下側よりも使用されます、此廊下を通りて前が臺所となります、住宅建築に於きまして此臺所は、常に吾々建築家の最も頭を惱ましてゐる曲物であると考へます、衣、食、住の三要素の內食と住とを握手さす所ですから、此緣談は中々六ケ敷いのも宜なるかなでせう、總て何れの室を設計するにも、設計者は常に來客にもなり、主人側にもなり、又婢の立場にもなつて考へなければ理想に近いものは出來ないと思ひます、臺所に於ては殊に然りでせう。

先づ衛生と、經濟と、能率增進の三つの點に就き意を用ひ周壁と天井の取合は丸形とし、炊爨器具は總て使用の場所に夫々仕舞ひ込み整頓する樣にしました、高五尺巾十尺の廻轉付大窓に面して調理臺、釜臺、七輪臺等を配列し上部天井より屋外に向ひ臭氣筒を設けてあります、臺の下部は小

き開戸となり器具を入れ開戸の裏は器具を吊します、七輪臺の右端は調味戸棚となり内部には、屋外に向ひ換氣孔を設けてあります、之に隣して食器戸棚を取りました、流しは上、下の二個を設け一を食器戸棚の側に設け、一を踏込に取りました、此上には下女が品物の量目に對する觀念を抱かす爲め天秤を設けてあります、其他裏階段下は物置、冷藏庫、電話室と高さに應じ配列し冷藏庫上は物入とし開戸は下女の整容に供する可く鏡付と致しました。

次に炊爨設備に於ては主として電熱を用ひ、補助として瓦斯を用ひます、浴室等多量の湯沸には瓦斯の方が早やくて安價の樣です、依つて階上浴室のバス





洗面、臺所の雜用の湯は一つの湯沸器を臺所下流の上に取付ます。此湯沸器は最新獨逸式瓦斯湯沸器にして水道の途中を熱するのでして、カランを開けば水壓に依り瓦斯に自動的に點火し得る樣になつてをります。此能率は一分間七升の水が熱湯になつて出で至極便利なものであります、次に之は何れの家庭に於ても必要なる事で而も等閑に付してある一事があります、そは醫藥品と消火器を入れ置く戸棚を家の內で最も便利な處に据置くことです、前者は人命の應急手當、後者は火災の應急處置であることは申すまでも無いことであります、此意味に於て臺所と食堂の中間廊下に食堂のサイドボードと同樣壁の中を利用し、戸棚を設け下部は傘置場となつております。

次に書畵、謠曲、茶の湯等を樂むにはどうしても古來の疊が最も親しみが深いと思ひます、此意に於て主人室、夫人室等は純日本式となし、疊付の椽側に依り包まれてをります、浴室は香よき檜風呂外釜式となし、焚湯は建家外部より石炭を入れ置き內部より出す樣に致しました。

諸設備に就きましては、煖房は電熱を用ひ、夏はファンを十一ケ所程取付ける樣になり、電燈は總計七十八個室に應じ設備致します、又糞尿は汚水處理法に依り處理する事になつております、次に裏門は臺所に近き場所に設け、傍に芥捨場を作り之に隣して洛濯場、物置等の附屬家があります

以上申述ました事項は限りある豫算なる故貧弱なる事は申すまでもありません只如何にしたら日々便利で能率の上るかを比較的研究したものであります。

連峯の峯の一つや雪のこるる



關東方面震火災被害視察日誌【二】

小川安一郎

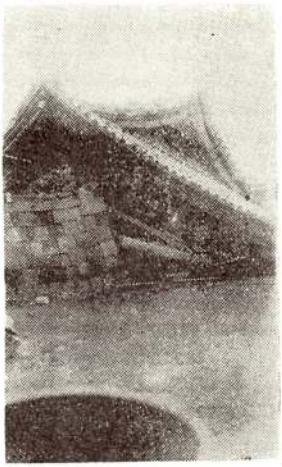
一、此の鐵筋『コンクリート』大工場の倒潰を目前に見た時は實に建築物は皆倒れる者の樣な感じが頭に直角に感じたのである。

此の建築は同社建築課の設計で某工學博士の顧問で　最新式『ビームレス』の『フラットフロワー』の構造なる鐵筋大工場にて某組の請負で　本年七

東京電氣川崎工場

一、本社大屋課長殿より同會社製造部長清水氏宛の紹介を受けましたので同氏に面會を求め案内を乞ひしに、御多忙中特に大雨中にもかゝわらず親切に案内せられたので實に好都合でした。

月に出來て一部移轉、其の他移轉準備中でありし由、吾々は此の構造なる建築は米國の雜誌の廣告には時々見た事あれども、實物を見たのは初めてであり丈け、夫れ丈け非常に面白味を以て見分せし次第で如何にせん是等構造に就ては、吾々の範圍でないので、只外觀丈の注意すべき點丈を見分して歸つた樣な次第で、同行の某君が充分興味を以て研究して居る筈だから、同君から立派な報告を聞く事にして先を御話する事にする。



川崎ヶ師境內の鐘樓の崩落

其の見分せし事より考へれば地盤の點が第一で（特に其十三號工場の如きは池を埋立てゝ建築せしと云へり）

一、吾々が一見した所に依れば施行の點と

一柱の太さ

一鐵筋のジョイント點

一コンクリート打接ぎの點

右の諸點に就て今少し注意したらばと云ふ感が起りし、特にコンクリートの打接の點及鐵筋の『ジョイント』に就ては、甚だ人道の許すべからざる事を敢て斷行してありし事である、（此の事は舊建築物の崩潰の分に重に見受けられたのである）是れは申す迄もなく、鐵筋の接合を充分折り曲げて、長く重ねて充分卷付け置かなくてはならない事であると思ふ。

一、此の建築の地盤下一尺位の所より折れて橫樣に倒れたる其折れ口を見るに鐵筋の接合が四五寸位で、然も折り曲もせずに差し込みたる丈にしてありし事、又丁度其の部分が地形の『コンクリート』と『コンクリート』と壁體の打接ぎの個所でありし爲め、能く其施行上を今見る事が出來たのである。

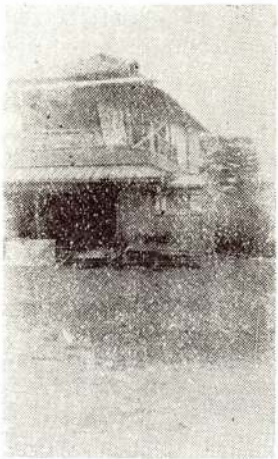
夫れは丁度土の上に直にコンクリートを打ちたかの如く、其の打接ぎの折れ口が五六尺も上に見

へる様に上つて居るのに、其の面に古き土が充分附着して居る事である。

是れは想像するに根切り後基礎工事が出來後埋戻しの時の土が地形『コンクリート』の上面に掛りし儘、水洗も掃除もせずに壁體を打接ぎたる様に見受けられるのである、實に驚くの外なき次第である。

斯の如き有様なる故此の大建築も物の見事に打倒れたるも偶然でない様に思はれるのである。

一、次に『ビームレス』『フラットフロワー』式工場も半潰の者に就て見るに『フロワー』の方即ち『スラブ』には一つの龜裂もなく、柱が床を受けてる個所で、柱の首に成る所が壓潰されたる爲め其の部分丈が破潰して居る事から考ふれば要するに柱が床を支ゆる事が出來ずに初め柱が壓潰されたる爲め床が落て此の不幸を見たると思ふ。

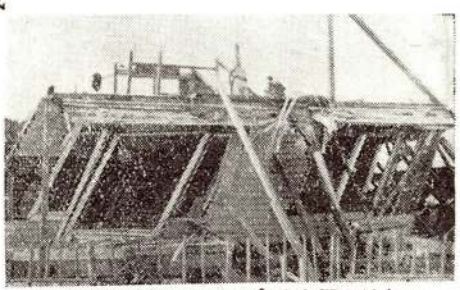


川崎大師境内の住宅破損（注意階上破損甚しきもの

此の有様を大風雨の爲め寫眞を採る事が出來なかつたのが殘念であつた。

以上は私が只見分して感じた儘を書き並べたのみで、其の間違の點は御斷至す次第である最早同會社は退場時刻なる爲め殘念ながら深く御禮を申して汽車にて東京に歸れり私は大井に親類を見舞ふべく又同時に同附近の狀況を視察すべく一行と別れた

一、以上の川崎方面は地盤の惡しき事は幾尺掘りても堅き地層がなきと云つて居る人があるので、家屋崩潰も亦、當然であると察せらる同夜は終夜



大船田園土地會社住宅の慘狀（其の一）

の大風雨なる爲め相當の修繕も成されたる家なりしも、大雨漏りにて實に閉口せり　是れも地震の賜物だと可々して震災氣分を味て宿泊せり

十一日

大井町の後藤毛織工場

此工場は親戚の所より東京へ出る途中で煉瓦造の鐵木混合の小屋組で煉瓦塀と共に大工場の半以上崩潰して取片付中であつた然し其の破損して殘り居る工場で盛に營業を續けて地震の事を忘れ仕事に從事し居るを見て大に氣持宜しく感ぜられた



大井田園土地會社の住宅の慘狀（其の二）

寫眞を二三葉寫し友人と共に或る方面の某邸所有の○○文庫を見學に行けり。

一、其の某邸○○文庫　是れは名前は依賴に依り特に秘す）此の建築は本館五十四尺に三十六尺高さ二十六尺で　袖が向て前右に出十五尺高さ十七尺の者が附屬したる壁、厚煉瓦一枚半に外部三寸五分の花崗石張で、內部Bの『テホロータイル』積の約一尺九寸位の壁厚を有する蛇腹もなき、眞四角な立派なる氣持宜しき建築であつた。

此の建築は地盤の勾配の所に、一昨年十一月起工して、本年八月末に全部落成したので九月中に家具も入れ、一部は持込みつゝありし）裝飾も出來上り、（大切なる立派な家具は未だ請負人の所にありたる由）設計者も、施主も共に喜で居りし時に、此の大地震の爲め窓楣の下端の所より立派に二つに別れ、約七分以上の目違が出來る樣な大龜裂を生じたる事、實に氣の毒千萬、設計者某工學士は非常の苦痛に悶へられ、施主も實に殘念に思はれて居らるゝとの事で、見る私も氣の毒で、立派な（デザイン）である丈、尙更、殘念に思はれたのであつた。

一、如何なる理由で斯の如く大龜裂が出來せしかに就ては此の建築に初から關係したる人丈け嚀叮に說明を左の通りしてくれたのである。

是れは前述の如く、勾配の地盤に建てた爲め斯樣事になつたと。即ち家の長手の方に地盤が勾配になつて居る故、地形を地盤に沿うて、高き處は六尺低き處は十三尺に根切りを成し、其十三尺の敷に、最初一通り『コンクリート』の『ポスト』の基礎工事をなし、夫に『コンクリート』の『ポスト』を六尺の敷並に立て埋戻しを成し、其の上に六尺の敷並に『コンクリート』地形をなし、其の上に建築したる爲め其の地形の段違の敷の所より折れたる爲め、斯の如き慘狀を呈せしならんと云へり、此の基礎工事を十三尺の敷迄、全體を掘下げて、同じ『レベル』に地形を成し、建築したならば斯かる事もなかりしにと、大に悔しがつて居つた樣な譯で、大に、將來、斯かる場所に遭遇したなら注意を要する事と思ふと話しつゝ、東京驛に行き一行と落合明日歸阪すべく切符を一所に買求め、私は明日大船地方を視察すべく目論見居る爲め　只今より横濱に行く事に定め、一行と又別れ、横濱を一通り視察すべく詳しき視察は明日一行に依頼して出發せり午後二時過ぎ

横濱視察

一、横濱は出京途中で汽車の中にて覗きしも『ステーション』に下車して一歩を踏めば『ステーション』は見るも無殘の燒跡で、改札口は『バラック』で一寸した柵を作りたる所より出入をさせて居る樣な次第で他は思ひ知らるゝのである町も東京よりは餘程整理も出來て只工事が架けたる橋が新らしく光て居るのみで他は燒殘りの亞鉛引鐵板で『バラック』を建て住居して居る樣な有樣で一層悲慘であつた（横濱に就ての見學は先發諸氏の大に盡されたる事なる故、時間都合上只覗き見る事にせり）

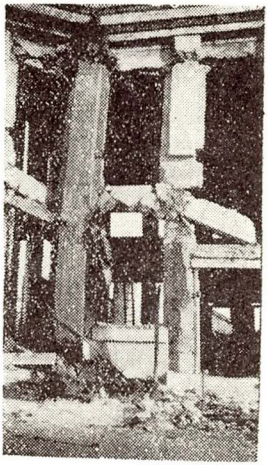
大船土地會社の住宅の慘狀（其の三）



一、最早日沒時刻なる爲勞働者の歸りはげしく、

急ぎ住友銀行支店の方向に進みたるも一寸見當を付けるに苦しみ、一二度人に尋ねて『テント』張りの營業所や『バラック』の假營業所は出來上り居るを見出す事を得た樣な次第で、留守居の大工に、出張員君の氣嫌を尋ね、左右田銀行の災害跡や、橫濱會舘、正金銀行慘狀を見物して當時の同行の『ドライエリヤ』の中に多くの死燒者の事を思出し人顏を朧に見へる頃とて何となく颯然たらしめたのである。

一、正金の西隣なる川崎貯蓄銀行が鐵筋五階建白張付煉瓦の立派な建築物で然も『シャッター』は大野式を使用したるに關らず、少しの破損もなく此の猛火と大地震に遭遇せしに、立派に現存したるは實に不思議と云ふべく又天祐とも云ふべし。



小田原通商銀行（施工中の鐵筋コンクリート）

正金の大建築の隣で且つ建築周圍の關係と風向きの宜しきを得たるならんと察せられるも如何にも不思議である。

此の樣に不思議なる事ある故建築金物屋特に大野式シャッターは一般に猛火の防火には用をなさないと云ふ定評あるに反し、是を提げて大に廣告せる事ならんとも想像せらる。

之の位で橫濱の震災火災の氣分を見た事として心を殘して『ステーション』に急ぎたる頃は人顏を見る事も出來ない立派な初夜で、東京の宿に歸りしは八時過ぎる事二十五分なりし。（未完）

朝露に踏めば

崩るゝ地の裂け目

紅波山の窟墓見物——張玲の木賃宿

——續埃及遊記(二)——

工學博士　天沼俊一

十月二十四日　（火曜、好晴）

今朝は四時に起きた、いくら熱帶でも十月の下旬だから四時ではまだ暗かつたが、星は降る樣で久し振りに參宿が頭上に輝いてゐるのを見た。氣のせいか星の光りは強く、空氣は透明で冷たく風は凉しく、非常に爽快であつた。四時半朝食を了り、五時下り列車にのつてミニア驛を發す、僅に四十分でAbou Kerkas驛着、下車して荷物は一時預けとし、驢馬を雇つて乘る。實のところ私は初めて驢馬へ乘つたのだが、落ちる心配はなし、萬一落ちても怪我をする心配もなし、頗る呑氣な間の抜けた動物である。

田舍道を行く事約四十分でナイル河畔に出た、途中小徑に沿ひてコプト墓數十あり、これも亦四角な上に圓い屋根をかけたので、昨日の葛饅頭に似てはゐるが、一寸面白いので寫眞がとり度くなつたが、早朝光線不足につき、歸途にとる事にして行過ぎた。ヘメダは途中少しく後れたので、私一人馬丁と共に、朝霧で玉蜀黍畑も河面も一面に糢糊として霞んでゐる中を、河岸に沿へる細い道を行く、忽ち對岸即Benihasan（一にBeni Hassan, 紅波山のあて字はどうか）の窟墓のある丘の後方より、朝日が昇つたので急に世界が明るくなつた此瞬間は實に偉大なる美觀であつた。賴山陽だとうまい併し難かしい形容詞を竝べて記事文を作るのであらうが、私には夫れは愚かもつと遙に拙い

文すら作りかねる、此の一人でみるのは惜しい景色を止むを得ず獨り觀賞しつゝ、六時三十五分渡場の何とかいふ寒村につき、下馬して休むひまもなくヘメダは追ひつき、直に渡船の談判を始めたのであつた。



ナイル河畔紅波山窟墓への一風景
船場村落に於ける婦女の水汲み(午前六時半頃)

折柄素燒の德利を頭上にのせた村婦等、水汲みの爲め川と家々との間を往復してゐるのが絡繹として絶えぬ、何れも例の黑布を頭より冠り跣足である、其面相衣文をそばで見ては興醒むるが、遠方からみると中々に捨て難い風情がある、萬緑叢中黒點が寫眞に出てゐるが 何れも朦朧としてゐる

併しこれは歩いてゐるのを寫したから、活動してゐるところがよく現はれてゐるので、作りつけの人形でない證據である。

埃及人はよく頭へものをのせて歩く、殊に水汲女は素燒の德利を必ず頭へのせる、小亞細亞、中央亞細亞邊は知らぬが、印度に於いても同樣である、我國でも八瀬大原は此風俗がある。十年計り以前に木村鷹太郎氏の著書で、日本人はGreco-Latino 人種だといふ說を讀んだ樣に記憶してゐる、此木村式を應用すると頭へ物をのせる點から、少なくとも八瀬大原女は Egypto-Indian 人種が土着したのだと言へる理屈だ。花川戸助六がシケリクスの轉訛だなんて言ふより、此の方が理屈があると思ふ。尤も北亞米利加の Pueblo Indian の內にも、物を頭にのせる風がある、さうすると八瀬大原は亞米利加にも關係がある樣になり、埃及印度人種丈けでは物足らぬが、反つて亞米印度人の原は、諸說紛々たる中に、日本人だといふ說がなくもないやうである。してみるとこつちが本家で、むかうが分家である、それなら何も心配するには

當らぬ。兎に角頭へ物をのせて運搬するのは、東洋式で頗る面白い。

埃及はいふ迄もなく水に乏しいから、村落は必ず河畔にあるといつていゝ、河口の三角洲こそ一圓豐饒で水もあり普通のところと同じだから、村々も散在してゐるが、開路以南は河に沿ひ若干の地域丈けが耕作に適するのみである、だから人の住むに宜しいのも同じく此地域丈けである、だから村落は必ず河畔にあるのである、そしてこの河の水が飲み水にもつかひ水にもなる、汎濫期には屢ば記した通り澤山の泥土が混り、其無數の小粒が浮泛の狀態にあるから、牛乳が白色に見えると同樣、全體が褐色に見える、夫れを一種の形をした素燒の德利に汲み、頭上にのせて家に運び、おどましておいてのむ、だから色が少し薄くなる位で、泥土は同じく交つてゐる、だから結句泥水をのむのである、併しこの水は例へ泥が交つて居ても、飲んで決してあたらぬさうだ。この河は Victoria Nyanza 以北沿岸住民の生命の親である。水汲みは女の每日の大切な仕事の一つである。だから村婦は何れも朝第一に水汲みをするのである。

扨て對岸へ渡る一段であるが、船はそこにあるけれどもさう直に要意が出來ず、漸くにして客も驢馬も、船頭、水夫、世話役の輩合計十名許り乘込んでから、曳船をして十町計り左岸を溯る、それから帆をかけて斜に河を横切り中の島へつけ、復た同樣に曳船をして島を廻り、愈對岸へ着けるのだが、これが中々容易でない、流れが早いのと風が全くなかつたので、船頭や水夫が隨分に蹈張つたが思ふ樣に行かず、大分に押し流され漸く着いたのは八時十分であつた、丁度河を渡るのに一時間半ばかりかゝつたのであつた。

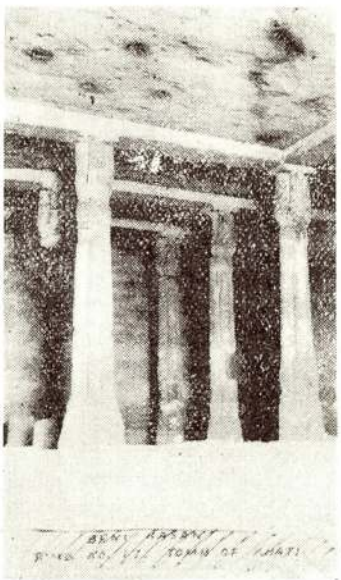
船から出で又一所に積んで來た驢馬へのつて行く、丘の近く迄は無難であつたが、其麓に臨時の川が出來てゐた、これが中々入念な川で巾も割合に廣く且つ深く、村の鼻つ垂らしが河童の眞似をしてゐた、こんなだから到底驢馬では越せぬし船もなし、そこで可なり廻り道をして淺瀨を探して恙なく向ひ側へ渡る事が出來た。

川を渡ると直に斜面で、こゝは徒歩で上らねば



紅波山に於けるアメニ墓内部

此丘の中腹、は西を向いて合計三十九の墓が竝んでゐる、この全部が所謂紅波山の窟屈として雷名天下に轟いてゐるのであるが、併しこのうちには帝王のは一つもなく、何れも當時の貴紳の夫れである、第二號墓はアメニ(Amenni又はAmeni-emhet)ので、第十二王朝なるSesostris I. 時代即ちならぬ、此時私は案内人に向ひ、上の窟墓は自由に入れるか、若し入口に柵でもあるなら開閉のための番人はゐるかと尋ねたら 柵はあるが番人は直に來ると答へたので其まゝ登つた、そして先づ第一に出たのは第二號墓の前であつた。



紅波山窟墓内部の蓮雷柱

約前二〇〇〇年の人だつたさうである、墓の形は入口に二本の八角柱があり、内部には四本の十六面體柱、所謂Proto Doricと言はれてゐるので、各面の淺いFlutingが判然と見へた、内部の桒子は柵外からであつたが、光線が充分だつたので明らかに見る事が出來た、其天井がSegmental Vaultになつてゐるのも面白かつた。

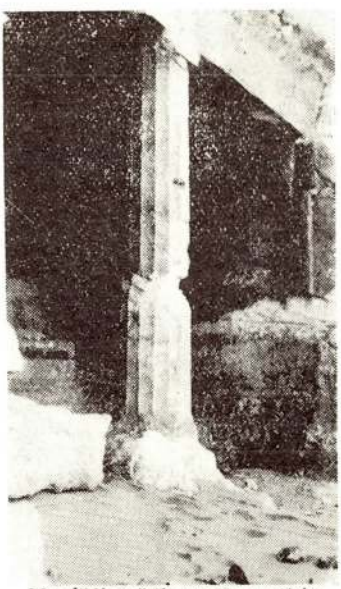
この十六面柱をProto Doricとはいふものゝ、眞正のDoricとの重もな相違は、Echinusのなき事礎盤のある事、時々象形文字を刻する爲めFluting のなき事等であるといつて、此說に反對する向もある樣である、併し又一方からいふと、其相違

が即ちProto Doricの名の起つた所以で、これでEchinusがあつたりBaseがなかつたりしたら、ほんとのDoricであり、Protoなんて字はいくらもある其相違があるからこそ面白いのである、私はだからProto Doric説に賛成しておく。

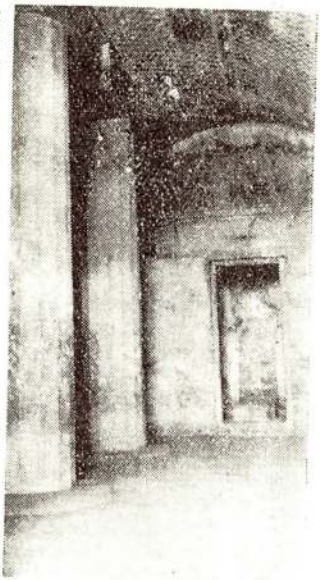
かゝる様式の柱はこゝ丈けと許り思つてゐたのに、さうではなくて數日後にKarnak及びその對岸Deir el-Bahriに於ける名高い女王Hatasuの殿堂に於てもみた、案内記にはAssuánにもあるとあつたが、それはつい見なかつた。かく後には相當に類例をみたが、今日は初めに思ひがけなくこれにぶつかつたので、其瞬間私は『あゝこれか』と思はず獨語し、案内人から何の御用ですかときかれて、一寸まごついたのであつた。

此墓の隣りは第三號で、こゝにも鐵柵があつて入れなかつたから外から覗いて置いた、墓の番號は忘れたが、墓の前面に同じく十六面Fluting付のがあつた、夫れは寫眞に示す如きものだが、光線の工合で寫眞ではさつきのより明瞭である。

以下澤山の窟墓の並んでゐるうち、第十五及び第十七墓が特に有名である、前者は第十一王朝時代の縣知事Baket後者は其子で父と同じく良二千石たりしKhetiので、殊にKhetiのは蓮蕾柱が立ち之れに施せる色彩もまだ殘つてゐるのが珍らしい其隣りの墓には番號がかいてなかつたか、又はあつたのを見落したか、今では分らなくなつたが、順に行けば第十八號であらう、其内部は柵がないので自由に入れたが　こゝには同じく蓮蕾柱が十本刻み殘されてゐる、併しその内完全なのは僅に五本で　それも半分作つてやめたのか、基部に近く未成のまゝ殘してある、其一部を寫眞にとつたのをこゝに挿入したが、其左の方二番目の柱は、



紅波山に於ける窟墓の外部に用ひられたるいわゆるアリード式原柱



紅波山に於けるアメニ墓の内部

柱身がすつかり壞されてゐる、だから柱頭が天井からぶら下つてゐる樣で頗る奇觀であるが、そこは窟墓の都合のいゝ所で、元々岩を刳貫いて作つたのだから落ちる氣づかひはない、柱頭の宙乘りなんかはめつたに見られぬ圖である。

扨ていつ迄待つても番人は來ない、馬子は上から大聲を出して呼ぶが中々來ない。先刻番人は直に來るといつたのに、これぢや困る、馬子を呼びにやつてくれと案内人に言つたが、中々埒があかぬ、其間に寫眞を七八枚とつた。此のあいだ開路の古蹟保存事務所で、役人に寫眞撮影の特別許可の手續を尋ねたら、夫れは絶對禁止で御座ると來たので、大に悲觀してゐたが、番人が居なければ構ふまい。夫れに別に禁止の揭示も出て居らぬから、若し私が役人にきかずにゐたらゝれまでゞ、禁止の事は知らぬ筈である、だからさう假定して寫したのである。中學校で代數や幾何を習つた時代から、假定をする事は先生から敎はつてゐた、夫れを今回應用したのである。

前にも記した通り丁度朝なので、逆光線ではあつたが柵外からでも可なりよく見えたし、又例へ内部へ入つても一々ベデカと引合せて感心してゐては三日や五日では足りぬから、例によりざつと一通りにしておくより仕方がない、さうかうしてゐるうちに案内人は時間がなくなるといふ、きいてみると汽車は午後一時にアブウクルカス驛を出て、七時にバリアナへ着く、夫れをはづすと今度は午後三時のSlow Trainで、十時でなくては着かぬといふ、昨夜四時間位ほかねて居らぬから、今夜十時着の汽車では遲くなりすぎて困る、どうしても一時のに乘り度い、其爲めにはもうそろそろ出かけぬとあぶないさうである。

威かしもあるらしいが、歸りにはまた河を渡ら

ねばならぬ、往きに一時半かゝつたが、歸りは同じ位かゝるか、もつとかゝるか全然見當がつかぬから、きいてみたが矢張判然せぬ、だから相當の時間をみておかねばならぬ、さう思ふと例によりもう氣が落付かぬ。驛の一町位手前迄漸く近づいた時汽車が出る樣に思はれてならぬ。だからもうすつかり諦めて了ひ、歸らうといふと、案内人は内部を見ないでもいゝのかといふ、先刻から急がしておき乍ら何をいふのか分らない、そこでこんな問答を初めた

『いつ迄待てば番人が來ると思ふか』

『分りません、多分居ないのでせう』

『汽車の時間があぶないさうぢやないか』

『三時のにするつもりならゆつくり出來ます』

『一時のに乘り度いがもう何分位いゝか』

『もうそろ〳〵出かけた方が安全です』

愈よ思ひ切つて山を下り、驢馬へのつて先刻の川のところ迄來ると、入れ違ひに番人が二人山を登つて行く、夫れを馬子が見つけて呼び戻す。此時案内人は私にもう一度上つて内部をみるかときくから、時間はいゝのかときくと、今から上つて見て來る位の時間はあるといふ。さつきから案内人の言はまるで信用が出來ぬ事になり、何を言つてゐるのか薩張分らぬ、もうかうなると厭氣がさし肝癪は起る、もうやめつちまへといふ氣になり、兢々しながら川を渡つた、理由は萬一驢馬が轉ぶか乃至は尻餅でも搗いたら、折角逆光線に工風して寫した寫眞を全部フイにしなければならぬのが恐しいからである。

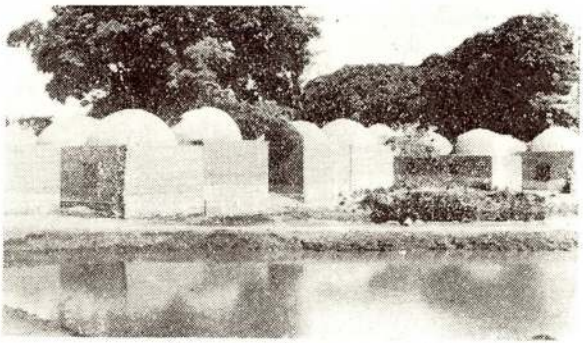
漸く渡り了つたところへ番人が追ひつき、案内人と何か言ひ合つてゐたが、遂にヘメダは私に向ひ、若し今からもう一度上つて内部をみるなら、此番人二人で川を渡して連れて行つてあげるが、見る氣はないかといふ、時間をきいてみたら、今から行つてみても一時の汽車に充分間に合ふと云つた。こんな事なら先刻山の上でもう少し待つてゐればよかつたのだ。矢張ヘメダはいかん、職業的案内人根性をまるだしに出したのであつた、そこへもつて來て被案内人は、大概の場合發車前三十分に停車場へ行つて待つてゐる癖がある男だか

ら始末に悪い、とう〳〵斯様な事になつて了つたのである。

併し考へてみると——考へてみないでも分つてゐるが——もう一生に二度と來る事はあるまいから、やめれば機會は永久に去つて再び歸つて來ないのである、だから此際奮發した方がいゝ、もう一度川を渡つてあの斜面を上る事にしやう、と決心をした。

墓番二人が竝んで左右の腕を組み合つたところへ、私は腰をかけて、兩腕で二人の首つ玉へ噛り附いたが、どうも少しく不安定だ、そこへ馬子が後ろから來て私の尻を押したまゝ、つまり三人がゝりで川を渡したのだ。此時番人の一人は持つてゐた杖を貸してくれたから、其お蔭で割合に早く且つ樂に斜面を上つた、そして第一に第二號墓に入り、先刻外からみておいた十六面柱をそばでよく觀、大體測つたら一面の巾約七寸、しやくりの深さ中央にて約三分あつた、內部の壁畫も一通りみて外へ出ると、川の向ひ側で待つてゐたヘメダは大聲を出して呼んだが、此時は彼に對する反感も手傳つたせいか、大に氣が落付き、知らぬ顏をして第十五、第十七の二窟をみた、其の爲め色彩の可なり殘つてゐる蓮蕾柱もそばでよくみる事が出來た、色彩した人物、船、家畜等は他でもみられるから大概にしてやめ、斜面を降り川を渡り、往がけにみておいたコブト墓の寫眞を撮り、順路を驛へ歸着した、時に後零時二十分、發車迄にはまだ四十分もあるけしからん事で、案內人の不親切と、自分の間抜けとに原因して、初めから失敗して了つた、第三號も充分見られたのに最早今となつてはどうする事も出來ぬ。

ヘメダは心附として馬子に十五ピやつてくれといふ、それから驢馬の借賃はいくらかときくと、一人往復二十四ピだといふ、怪しいから試みに驛長にきいてみたら、これは間違なかつた、さうすると案內人と二人で四十八ピになる、夫れに對してなら五ピでいゝのに十五ピは多過ると思つたがさつき川を渡る時手傳つて大に功があつたから、扨て夫れをやる事にした　考へてみると驢馬賃往復二十四ピ（約我二圓四十錢）は高くない、埃及旅行前後十



アブウ・ケルカ郊外コプト墓

二日、安價と思つたのはこれ丈けであつた。

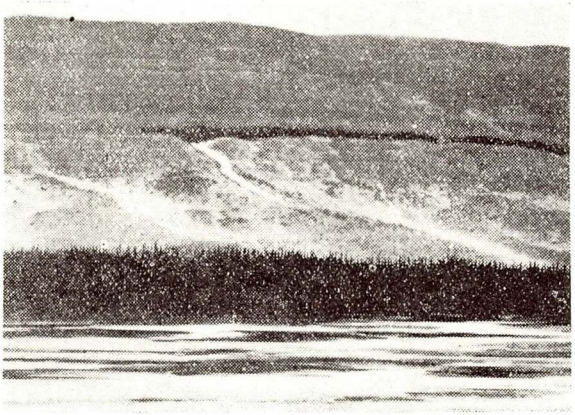
驛の一二等待合所でミニアの御殿館より持參の辨當を開く、そこへ乞食が物貰ひに來る私は例により知らん顏をしてゐたがヘメダは一片の白銅と食物の餘りをやつた、いづれこの白銅は數倍にして私から取り立てるのだらう、飛んだところで時候はづれのSanta Clausになつたものだ。

乞食といへば埃及や印度では仕方がないが、歐洲に於いても、少なくとも西班牙と伊太利とでは汽車の窓へ來る。去年の師走の十五日、西班牙國はセビーアより愚樂灘に向ふ途、いくら南國でも日の暮れは可なり寒いから、窓は閉めておいたのだが、汽車がとある田舍の寒驛へ停つた時、大供子供の乞食が一二等車を物色し、窓外より客の顏をみて物をこふのであつた。彼國では驛の構內構外を我國の樣に廢物の枕木の柵で嚴重に區別せぬから、入つて來る事は自由である。子乞食は列車の踏段へ上り窓硝子を外から敲き、先づ客の注意を惹き 續いて何か言つて手を出す、其聲『ニョリイトウ』と聞こえ、長く尾を引き如何にも悲哀の調を帶びて人の肺腑を抉る、可愛想になつたが暫く樣子をみてゐる內に汽車は發した、そして次の驛へ停ると同じ奴がまた來た、次も復來た、丁度三四驛の間はかうして汽車について來た、多分汽車のどこかへとりついて只乘をしてきたか、或は二等車へのり停る度に出てきたかであらう、流石に大乞食は汽車については來なかつたが、窓外に立つたのが二三驛あつた。伊太利では烏井野驛で停車中大乞食が窓外へ來た、印度では枚擧に暇がなかつた。未だ他國でも來るのかも知れぬが、私は經驗がないから知らぬ。日本で來ぬのは國民

全體が勤勉で乞食なんか一人も居ないのではなくて、萬一乞食の輩が廢物利用の親玉なる枕木の棚から入らうものなら、掃除夫や驛夫がお巡りさんの樣な態度で怒鳴りつけるから、夫れで來ないので旅客はうるさくないから助かる。

汽車へのるには此所から更に切符を買はねばならぬ、ところが賣口は唯一つで、停車場の側面外部に向つて居り、可なり混雜してゐたから、どうやら出來かけてゐるらしく見えたQueueの最後らしいところへ立つた、暫く立つてゐる間に、これはキューではなくて、たゞさうらしく見えたのであつた事が判つた、即ち後に來た連中は無遠慮に間へ割り込む、だからいつ迄まつても私は依然として同じ所にゐるので、少しも進む事が出來ぬ、だからいゝ加減にして自己の權利を行使したが、腹の內では我國で切符を買ふのも同じ事だ、東洋人は決してキューを作らぬ、そして作れぬ人種であらうと思つたのであつたが、敢て感れた次第ではないが歐米が少々羨しくなつた。

改めて記す迄もなく歐米人は、切符を買ふのも郵便切手を買ふのも、小包郵便を出すにも貯金をするにも、電車へのるにもバスへ乘るにも、必ずキューを作り決して先を爭はぬ。一例を擧げると



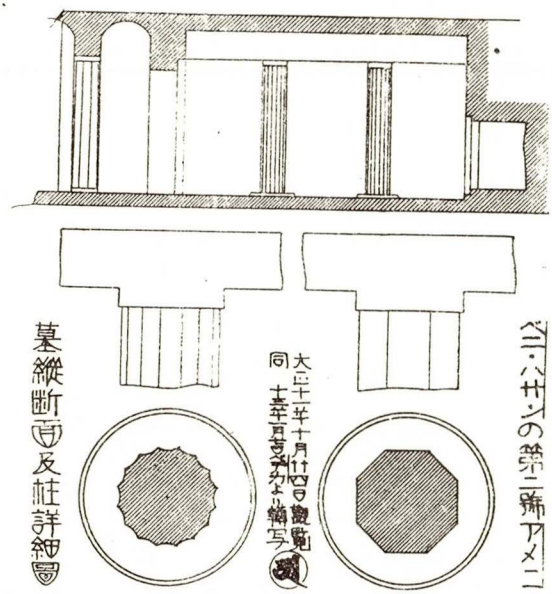
紅波山窟墓全景圖の中央より斜左上に向へる斜線は登り道で突き當りがアメニ墓前景はナイル河にて河岸に茂れる玉蜀黍である。

宵て倫敦の近郊セント・オルバンス St. Albans へ伽藍見物に行つた時、此所と Golders Green 間運びのバスへ乘る爲め停留場で待合はしてゐた事

があつた。暫くして倫敦から着いたバスが客を全部下ろし、一廻轉して大勢待つてゐる前へ來て停るはずが、さう都合よく行かずに少し手前、即ちキューの尾に近く停つた、此時尾に居た人は直にのれるのにさうはせず、先頭より一列側面縱隊のまゝ逆戻りして乘つたが、勿論乘り切れぬ、今しも筋骨逞しき英國製の熊さんが踏段に片足かけた。此時車掌輕く片手を擧げ「ニ」と注意するや、熊さんは大人しく手を放し次のを待つ事にした、其後ろにゐたものは勿論熊さんに從つた、私は目前にこれをみて、流石に英國製はちがつたものだ、和製ではかうは行かぬと思つて大に感心をしたのであつた。これはほんの一例に過ぎぬ、歐米人にとつては普通の事で何でもあるまいが、人を押しのけ



ナイル河畔の阿落紅波山窟墓へ の渡船場



ても先へ出やうとし、禮儀を守つてゐるのは馬鹿正直だと言つて笑はれる樣な所で大きくなつた者には、斯樣な行動は如何にも立派に見える。

然るに埃及へ來ると、もうさうは行かぬ、我國に於いても巡査や驛夫が聲をからして怒鳴つて漸く列を作らせるのだ、どうも東洋は西洋に比べて文明が後れてゐるのは情無い。併しこれも亦東洋式の一つである。

一時の汽車へ乘つたお蔭で、豫定通り七時バリアナ驛着、馬車で約半里を距れるナイル河畔の安泊へ着いたのは同三十分であつた。二階に上ると直ぐそこが廣間で、其三方に室があるが、扉は何れもガタガタで、向て左側の鏡板に白ペンキで念入の拙い字で番號が書いてある。私は突き當りの第五號室、卽ち往來に面した、從てナイル河に面した景色のいゝ筈の、此宿では第一等の室を占領した。

ところが驚いたのは、室はいつ掃除をしたのか到る所塵埃堆く、椅子は壞れ蒲團は破れ、寢臺はガタガタ動き蚊帳は性がなく、床は鷲張で紙張の天井は幾多の珍らしい朽木模樣が出てゐる、勿論電燈はなく、燈火としては小皿へ水を入れ、高さ約八分徑約一寸の蠟燭を其中央に置き、點火をしたのを背の低い頭許り大きな番頭が持つて來た。これでは暗くて仕方がない、日記をつける事も出來ぬ。

食堂は下だが、他に客がないので二階の廣間でたべた、そして兎も角も寢臺の上にひつくり返つた。今日は生れて初めて鐙のない驢馬に長い途をのつた上、途中大分に駈けたし、紅波山では斜面を二度も昇降したので、脹脛も尻も痛いから、安宿で寢臺が塵だらけで彈機が壞れてゐても、こゝで今夜一晩樂にねられるのを難有思はねばなるまい。

（大正十三年一月十一日稿了）

正誤表（一月號）

頁	段の行	誤	正
一〇〇	上一八	貫つて	貫つて
一〇一	下一	Omnibu	Omnibus
一〇二	下一三	していやに	してばいやに
一〇五	上一五	el-A.hmar	el-Ahmar
一〇六	下四	Sheiku	Sheikh
一〇七	上六	都合が	都合か
一〇九	上一〇	掲載の事にも	掲載の記事にも
一〇九	上一八	Bardud	Barquq
一〇九	下二一	出土分漆喰	出土飾漆喰

漫錄

建築叙情篇

廣岡峰太郎



屋根の情緒

雨露風雪を凌げば足るに茅の屋根あり、風流吟懐を事とする者には、こよなき天地とも思ふべし。幽かながらに聞ゆる松風の音に、まじりて聞え來るは樹立深く住みなす、いとも物寂びたる、落葉降りつもる屋根の下にて鳴らす木魚の音にかあらん。

草の戸を叩く水鶏の宿、雨降れば雨漏る蔓葺屋根の傾きしまゝなるも風情あり。『梅一輪一輪づゝの暖かさ』を想起せしむるは南享けて、心豊けき人の隱れ家の軒端を思はしむるあり。

青竹割りに葺ける庇に、短日の夕陽仰ぎて淋しむは誰が子にかあらん。

時將に酷寒、新聞紙上にて賑はふは降雪の記事なり。雪の降りつむ屋根の情緒は、雪國に住む人

々にのみ味はふ事を得る誇とすべし。

寒雨蕭條として降り初めし窓外を望めば眼の及ぶ限り、打續く屋根なり。憶へ、春夏秋冬星移り物は變れど、幾十幾百の都人士の、身心共に安らけき思ひに住ましむるは、彼の屋根、屋根の下なり。その他くさぐさの、世の煩はしき事などもこゝに書きつらぬるまでもなく、晝夜の別なく彼の屋根の下にて、行はれつゝあることは勿論なり。

寒風凜烈なる夕べ、暖爐を擁して、落日の映光を浴びて、見渡す限りの甍の大海原を望見しつゝそゞろに大都市の屋根の情緒を、談笑せらるゝ若き人々にてもあれば幸甚なり。

位置は郊外、山間の地にてもよろし、雜木林の中に、赤き瓦もて屋根を葺ける、所謂文化住宅の眺望も萬更ら、惡しきものにはあらず。二戸、三戸あるひは平地に、あるひは溪谷を隔てゝ、隱見するは、國民の時代思潮の反映なりとも思はれて來つ、心頓に微笑まれて來るものなり。

屋根は本建築（否西洋建築に於ても）の生命なりとおぼゆ。神社佛閣の建築は、言はずもがな、大にしては、皇居より、小なるは賤の伏屋に至る迄で、軒深く反り多き屋根は、美的なるものあり建築物本來の意義を沒却する者には非ざるも、近時頓に多く建築せらるゝ、五層六層の陸屋根造の建築物に至りては、屋根の情緒云々は申すまでもなし。

さりながら飜つて、西歐古代建築のある一部の屋根の美に在りては、淺學の身の、筆紙に到底盡し得られざるが至當ならんと、思はるゝ物あるは誠に洋の東西、時の古今を貫きて、究極の美は一なることをしみじみ思はせらるゝなり。

三笠の山に、小牡鹿の聲哀れむもよし　されど『奈良七重七堂伽藍八重櫻』の美に想到して、汝の頭を巡らせば、變化極りなきかの、屋根の美に、屋根の情緒に、感激なくして、佇立久しくなし得ようか。櫻紅葉に降りそゝぐ、秋雨の音も、屋根の情緒をたゝふる、音律なるかの如く、きゝなすも至當ならんと思ゆ。十二月八日

窓の思慕

冴返る夜空仰げば、幽けく光る星影に、佇みて野邊に獨り憶ふ。

星は蒼空の窓、限りなく伸び、擴がれる大地に點綴して灯るは、人家の窓である。惱み多ければ星影も、恨み深ければ、小窓を洩るゝ灯の色にも誠に窓は思慕の淋しき姿である。

しめやかに忍び寄る、夜霧に濡れて、窓硝子の反射屈折は、妙なる交響樂を織りなす狀態にある。家の内部、外部は窓を通して自然の交歡をなす、人々は窓に倚る。自古現象は窓に映像する。

人々の瞳と瞳とが出會つて、お互ひに微笑を交はす時のように、建ち列なれる家毎に開く、窓と窓との交錯。言葉を換へて言へば、家毎の窓と窓とを繋ぐ線、角度、高低凹凸、乃至階調は、我等が視野を廣く、豊かに調和せしめるものである。人々の間になされる、暖い穩かな會話のように、窓と窓とが、さゝやき合ふ、そして愼み深い微笑を交はす。

窓は建築物にとつては　光の源泉である、我等が頭上に陽は循るとき、屋背窓よりは幽かなる光線を誘導なし、天窓に艶消しの太陽光を禮讃する。

雪の降る夜、窓掛を排して心ゆく計り、自然を觀照する、怖ろしい程な沈默の薄明の中に、絶間ない雪の合唱。春月、おぼろおぼろの空を步むに仄けくは見えて、光る粉糠の布置よ。

蒼空は氣遠い、おゝ、大地は現實だ。

我等の靈魂は、氣遠い星の窓臺に、跳り上らうとする。我等が悲願の、窓の思慕こそはあの、大自然の、平衡の確かさ、强さ、淨められたる蒼空の星扉——天上の思慕の窓。地上の思慕の窓の建設。

外部スティンド・グラスに落日、赤々と映えて中空に鳴り渡る鐘の音律は、鋭角を持てば、大氣は混亂に陷り、内部、灰銀色、及漆黑色、及眞紅を主調とせる、天井、壁、床に配するに、黄金色及紫檀の調度を配する一室の窓際の小卓に、燻杏の影は、奇怪なる想像を生ましむ。

白晝、靜かなる裏街を往きて、衝動を感じるは酒庫の窓なり。屋根瓦、所々剝落なし、苔蒸し、

壁體、殊に窓の周邊は、暗影を宿し、内部をうかゞふに由なきが如きはその一なり。

霜天の下、邊鄙、野鍛冶が家の　荒壁切り破りて設けし窓に、おどろおどろに、燃え映る火焔は人像をして、神秘の殿堂に彷徨せしむるが如く感じらるゝものゝ例なり。

我等の思慕する窓は天上の星、夢圓かに、眠れるものは眠りより醒めて、起きて憩ふは、いざ共に蒼空に、きらびやかなる星の窓を覗かう。

我等が現在窓に就ての考察(計劃)は餘りに規矩の末に走る。煉り返し盛り返す粘土の中から啓示が與へられる。永い〳〵月日の上の煉金である、我等が窓をして自由、考へしめよ。窓は建物の心眼。

おゝ我等をして、窓外の森羅萬象の、眺望をして遮らしむること勿れ

風は寒し、身は淋し、天上に瞬く星の影、地上にまたゝく燈影。思慕の窓に近づくを許せよ。

十二月十三日

悲しみて見る日は白し春の海

白きながらに黄昏れにけり

美の對象としての建築

水町與志雄

建築の發祥は、藝術的に言つて、その調律を求めたところから出發してゐる。建築は、人類がその發生當時の原始草蒙な時代に於いてすらも、決して、自然の脅威に對する恐怖からのみや、その用途や材料からのみ企圖せられたのではなかつたことは確である。身を外界から隱し庇ふことのみが建築本來の目的でもなく、その發達が單なる所謂必要や豐富な材料からのみ由來されたと見らるべきではあらぬ。木の枝葉を編み土を以つて無雜作らしくつくられた未開の土人達の小さい家にても、彼等は彼等自身の人間的の外貌を通して、彼等が信ずる所謂物象の靈魂なるものに接觸しそれを表現しやうとしなかつたとは即座に斷言することは能きぬ。藝術家の不器用さを、藝術のないことゝ愚かしく混同して考へてはならぬ　テラコッタの作り方一つを知らなかつた土人にも、藝術と呼ばれていゝものが決してなかつたとは、寫眞機や蓄音機を發明した所謂文明人には言へないのである。美を盛らず美に生きない藝術といふものが考へられない如うに、建築が如何なる意味に於いてもとも角も私達の思想の表現である限り、美を考慮に入れない建築と言はるべきものはあらぬ美は建築の一要素ではなく、建築は美の空間的の表現とみらるべきものである。材料のみが實ではないやうに、言ふまでもなく、構造のみが建築ではあらぬ。正しき建築は、疑ひもなく、高き美に座る。

建築の美しきは、その多角多線の美しさではなく、その全體としての均等完成の美しさにある。單一がそのまゝ美ではないやうに、復雜がそのまゝ美ではあらぬ。美しくあることは正しくあることゝ同意義であつて、正しくあることは卒直にあ

ることの謂なのである。均等とは眞直角に無愛想に突つ立つ意味ではなくて、各線の親和融合を意味する。垂直線のみが均等を保ち得るとは言はるべきではあらぬ。曲線や斜線すらが、しばしば正しき均等を保つ。ピザの斜塔は斜いたゝめに其美を割いだとは言へぬ。言葉を平易にすれば、直線のみが美を表現する線ではないと同じやうに、直線のみが建築を構成する線だと言はうとすべきではない。曲線はしばしば單一の美を復雜さの美へと導く。而も、明快なる批評家ジョン・ラスキンが曾て記いた如うに、建築とは彫刻或は繪畫を以て裝飾されたものでなければならない、これ以外のものは單なる建物でしかない日々なる言葉は、笑ふべき偏見として拒けていゝのである。所謂建物なるものに濃艶なる色彩や復雜なる線等を以つて裝つたものを、私は建築とは呼ばぬ。所謂建物を色づけたものが建築ではあらぬ。飾窓一つの有無が所謂建物と建築との差別とされてはならぬ。建築は建築であつて、それ以上でもそれ以下でもあつてはならぬ。建築の美は、第一に、その調律にある。構造がある後に調律があるのではなく、調律が構造の母胎である關係にあるべきものである。極言すれば、構造は調律の前には大した問題を與へ得べきものではあらぬ　單なる構造が調律そのものではない。調律は純眞なる單一から出發する。言ふまでもなく、激しく搖れ動くものには素晴らしい調律はあり得ても、調律は混沌亂雜の謂ではない。同じ如うに、動かず靜かに置かれたるものゝみにも調律はあると言はるべきではない言はゞ、建築は最も固形的な藝術と考へらるゝものであつて、一見、最も偶像的な藝術なのであるが、建築の美は又最も調律的な美であると思推されてはならぬ。調律とは、藝術ならざるものへ、あとから附加された裝飾の謂ではない。例へば、建築とその裝飾とに就いてのみ言つても、その建築本來の形樣の原理と、それに施されたる裝飾の美の問題とが、有機的統一的に　均斉されたる美しさを有たなければならないものである。建築とその室内裝飾とは常識的に二つのものと考へられ勝ちなものであるが、本來これ等は二つであつて

二つに對立すべきものではなく、單一なる美そのものに融合さるべきものなのである。美に境界線と呼ばれていゝものはない。美と美ならざるものとの對立は、言ふまでもなく、美でもなく均等でもあらぬ。均等とは對立の謂ではなく、融合の謂なのである。調律の本然の姿は、疑ひもなく、融合である。

建築の美しさは、又、その建築の重さにある。建築の重さとは、勿論、木造の建築よりは石造の建築の方が重量がありさうだと考へらるべき意味の重さの謂ではない。所謂建築力學もその物の重量も、今こゝで言ふ建築の重さとは些の交渉も有たぬ。ウウルオオスの五十五階の鐵筋コンクリイトのビルデイングが、木材で簡易にできあがつた正倉院の建築より重いといふ意味ではない。一言すれば、藝術上の表現の變化は常に思想の變化であり、思想の進化は又常に表現の進化である限り時代と世紀とに從つて、今こゝで言ふ建築の重さの内容は、勿論、種々雜多に變化する。古典には古典の重さがあり、ゴシックには又ゴシックの重さがあり得る。こゝに言ふ重さは相對的に評價さるべき重さではなく、各個に於いてそれ自體絶對の價値を有つ重さの謂なのである。即ち建築の重さとは、安易に言へば、建築としてのおちつきの謂である。建築のおちつきは、それ自體も早や自然的な優雅のうちに、伸びやかに安住する〻優雅はやがて美である。そのおちつきは所謂外部的な形容には些の關係を有たず、その深い内容と親しい交渉を有たうとする。淺薄は、言ふまでもなく、美とは正反對のものである。美が深い内容である限り、輕い外形に重い美をもりあげることは能きぬ。建築が單なる材料の集積ではない以上、その所を得た建築を得ないものと、その表現を得た建築と得ないものとは、自ら別個の藝術的な雰圍氣を作る。この雰圍氣の層の密度は、從つて、この建築の美の重さの價値を決定する。ドオムはドオムとしての所と表現とを得て、その重さの價値を決定し、ピナクルはピナクルとしての充分の重さの價値を得て、その美を純一な美としておちつかせる。美のおちつきは自ら美の尊嚴を生む。

建築の美はその重い尊嚴を守ることによつて安全に保たれる。藝術がその藝術としての尊嚴を失ふ時、その藝術は美と何の交渉もあらぬ醜惡なる器具にしか過ぎなくされる。建築の尊嚴が他の藝術に依つて奪はれてはならないことは　今更らこゝに言ふまでもないことである。かくて、建築の重さはその建築の美を評價し、その價値を決定する重さのない建築は、結局、美のない建築と殆んど同意義である。

最後に、建築の美しさは、又、單に所謂美的であるのみでなく、道德的でなければならぬと最近思惟され初めてゐる。藝術と道德との交渉には、今も幾多の論議ありさうではあるが、今こゝに言ふ道德とは、單に社會的考慮の上に立つ規約としての道德を言ふのではなく、本然の最高善なる道德を言ふのである。通常誇りやかに主張され勝ちのやうに、藝術が道德を越えるとは、藝術は道德を無視し道德の圈外に歩んでいゝとの謂ではなくて、藝術は規約なる道德を越へて、本然の最高善に生きるとの謂なのである、如何なる藝術も今こゝに言ふ善を越え踏みつけて、恣に存生することは能きぬ。『惡の華』もその基底に於いて善である限り、藝術としての全い存生を許されるのであつて、惡は惡そのまゝとして、如何なる論議に依らうとも、藝術の地位を簒奪すべき暴力を有たぬ。全體としての道德的善は、疑ひもなく、美を抱擁し美に融合される。善の虐げられたところに美は建たず、美に逆いた善なるものはあらぬ。惡は藝術を育てず、美を哺まない。善は直ぐそのまゝ美であり、美は又即座に善である　建築が善を無視して所謂美的なる美にのみ急がしく走ることの許されない理由は、即ちこゝにある。道德的なる建築とは、故に、誇張もなく自卑もなく素直に正しく表現されて、藝術的に完成されたる建築の謂である。歪められた惡の線を伸んで、美の大きい完成を期待することは能きぬ。正しく善をもりあげられたる完成は、この意味で、そのまゝ素晴らしい完成である。善は美の最も親しき姉妹である。

建築は、かくて、何よりも先づ健全なる美にその重心を置かるべきものである。健全なる美は全

らゆる藝術の嚴丈なる根であり、又うるはしく愼ましい花である。故に、美はその表現にあせる程神經質でもなく、又、突飛に曲つた表現を好まない。健全は美を奪ふことの能きない本質である。一見新しい創見らしく裝はれたる殊更らに歪められた奇怪な外線は、その建築にもりあげられたる純一なる美を、決して健全なる美として生長せしめるものではあらぬ。建築のヒステリカルな邪道が、決して新しい建築の創見ではない。藝術としての建築が、不安や焦燥や倦怠を、第二者に印象づけるものであつてはならないのは勿論である。而も建築としての美の完成は、單に古典世界に復歸し、その形式を愚かしく模倣することに依つてのみ將來されるものではない。模倣は美を生かさず、創見は美を生む。美は頑なる踏襲に依つて生長せず、自由な飛躍に依つて生長する。美は明るく、光の方へ生長してゆく。建築は單なる灰色の傳統ではあらぬ。單なる保有のための形式の保有は、藝術としての建築の自由なる發達は大きく寄與してくれる筈がない。美が常に新しく生れ出づべき筈のものである如うに、美の對象としての建築も、單に古典世界を模倣踏襲さるべきものではなく、生れ出づる美と倶に絶えず新しく生れ出づべきものである。故に、かゝる建築の偉大なる作者は、最も藝術的良心の鋭い美の創見者でなければならぬ。美の對象としての建築は、故に、美の創見者の最も良心的な藝術的表現であるべきものである。かくして制作された建築は、美の最も正しき表現としての藝術的價値を、千古に確立するものである。

沈默は聰明を養ふべき睡眠なり

鎌倉時代文化の薫り

慈眼院の堂塔

曼荼羅社同人　池田谷久吉

天下茶屋からYの來るのを待ちかねて出掛けた此の前、八瀬大原へ行つたときの苦しみに比べてはよほど容易な旅程ではあるが南海線、佐野の驛から片道凡そ五十町もあるので一寸歩き頃のよい道程である。

泉南地方はどこまで行つても頗る織機工業が盛んでどこの村にも一つ二つの工場がやかましい音を立てゝゐる。

そうだ　物質文明の斧はこうした田舎に迄その威力を隈なく逞うしてゐるのだ――

佐野驛といへば約　難波、和歌山間の中間に位して其の昔は佐野三千軒と謳はれて當時、北國の錢屋五兵衞と相對抗して海運にその覇を握つてゐたものに食野佐太郎なる長者がゐた。

然し明治維新に沒落して以來、街は凋く衰へてはゐたがその後織維工業の繁榮に連れて今は一大商工都市として停車場などは實にその規模といひ建築といひ一寸地方では珍らしい堂々たるものである。

Yと私とは脚絆堅めの裝束(いでたち)でてく〳〵と驛から東へ粉河街道を差して歩きかけた、小さな田舎の農村を五つ六つも通り越して少し足の疲れを覺えた頃、今迄はズット遠くに見えてゐた雨山、城山の山々はもうよほど近づいて犬鳴山などは手前のこれ等の山にかくれて見えなくなつてゐた。

そして間もなく大井關神社の馬場先に出た、老樹の並松が行儀よく三四丁も眞直に奥深く續いてゐて神々しい氣持ちに浸される。

こゝを通り抜けると突き當りに雁岐があつてその左手に有名な葉無樓がある。

いつたい私達の訪ねる慈眼院はこの境内と同一のところなので、ここからが慈眼院やらハッキリ分明がつかないほどやゝこしいところである。

（尤も、この寺は大井關神社の神宮寺として出來た爲めではあるが――）

庫裏へ行つて老僧　清原智道氏に會ふといつもの如く心よく歡待されてすぐと奥座敷へ通された。

南向きの部屋で、前には大きな鬱然たる大井關神社の境内を庭先の築山と眺めて生垣の垣間からと金堂と多寶塔とが置物の樣に見えてゐる。

先づ此の寺の緣起をたづねると、目下は眞言宗御室派に屬してゐるがもと天武天皇の白鳳二年（今から千二百五十年前）の草創で天平年間、覺豪阿闍梨が勅命によつて造營したものと傳へられてゐる、以來勅願寺として榮えた武門の歸依もなか〳〵厚かつたそうである。



慈眼院金堂

その後弘仁六年嵯峨天皇の朝に（今から千百十年前）弘法大師在住し翌々年に多寶塔、金堂等を造營し當時は輪奐の美を整へてゐたがかの正親町天皇の天正年中（今から約三百五十年前）南紀地方の事變に際して織田右府の之が鎭撫せんとするに當りて殘念にも兵燹の厄に遇ひ慶長七年九月、豐臣秀頼名刹の衰頽に迫れるを遺憾に思ひ之が再建を企圖し尾張國吉田半左衛門尉及祐清法印の二者に命じて堂宇の造營に當らしめ漸くにして奥の坊、明王院、中之坊、山之坊、稻之坊、上之坊、下之坊等を作らしめ中之坊を本坊として長老職がこれに住してゐた。



慈眼院多寶塔

また此れ等一山總坊の號を願成就寺福壽院ともいつてゐたが、今では慶長の本堂と鎌倉時代の金堂と多寶塔とが殘れるのみであはれ昔の偲を忍ぶよすがもない。然し古建築の遺物の少ない當今に於ては何といつても此れ等の堂塔は決して見遁すべからざる優秀なもの丶一つとして尊重すべき價値がある、殊に大阪府に於ては河内の觀心寺と和泉の釘無堂とここの慈眼院とを除いては他に何物も持たない事を思ふときに實に攝河泉藝術史上の白眉といはなければならぬ。

□　□　□

庭づたいに柴折戸を僭ると金堂のすぐ横に出た。建物は大きなものではないが形の小さいだけにまた云ひ知れぬ小ぢんまりとした堅實さ、力の美を味ふ事が出來る、その上昨年の夏修繕が出來上つたもので舊態の面目を一新してゐる方三間、軒高十二尺五寸、棟高二十三尺八寸、屋根單層四注造の本瓦葺にて稍高き墳上に立ち棟鬼板は前面に向拜を設け、柱は丸柱にて長押をつけ、柱の上部には肘木を用ひ、向拜柱は角柱にて軒は二重、角垂木を用ひ、組物三ッ斗、頭貫の鼻飾には鎌倉特有の繰形をつけ三方唐戸正面格子戸嵌め込み窓は欞子を用ひ四方切目縁を廻らし、内部床は拭板張にて組入天井を設けてゐる。

堂の創建年代は人皇九十代龜山天皇の御宇文永八年（辛朱）紀元一九三一年六百五十餘年前にて以上の詳細は所謂和樣に天竺樣の手法を加へた新派を作つたところの折衷派である。

内陣の須彌壇は少し破損はしてゐるが當代の遺

物として堂宇と共に各々特長が充分に味はう事が出來る。

□　□　□

多寶塔は金堂の東側にあつて創立年代は金堂と同時代のもので平面方三間下層方八尺八寸八分、上層大さ四尺六寸八分、屋根四注造檜皮葺にて相輪を頂き露盤高二十六尺、全高三十五尺、量に於ては現存多寶塔中最も小さいものであるが江州の石山寺のものによく類似し他の多寶塔に比して上層と下層との軒の距離が非常に接近し下層の軒高がよほどまた高すぎる樣であるが、此れは内部に須彌壇を設け佛像を安置する必要上所定の高さにしなければならなかつた結果であるが、此れを補ふために周圍の椽側を割合に幅廣く且つ床高を高くして塔全體の安定を保たしめ、然かも下層の屋根の反りが極めて低く緩かにしてある。斯の如き種々變化ある形態を持つた點に於て恐らくは他に類例のないものであらう、また全體の姿態よろしく細部・木割の纖細は殊に背景と調和して典雅の感を增してある。

元來此の種多寶塔は眞言宗特有のもので他の宗派には決して見られない塔婆の形式であつて現存の塔は維新後頽廢甚しくなつてゐたので明治三十九年原型に改築したものである、石壇上に立ち腰周圍に稍高き切目椽を廻らし柱は凡て丸柱にて墓股には當代特有の優秀な寫實的彫刻を施し、組物は出組で下層の上に漆喰塗の龜腹ありてその上に圓形の上層となつて勾欄を廻らして組物の四手先の巧に用ひられたのと、下層の方形なるに對比して上層の圓形であるがために構造上極めて複雜であるが外觀は龜腹の漆喰塗でうまく圓と角とを圓滿に結合の効果をおさめてゐる。

屋根の頂上には相輪を載せてゐるが是れ迄の三重塔、五重塔とは著しくその形狀と趣を異にし、相輪には露盤、覆鉢、請花、九輪、四葉、六葉、八葉がつけられ更に其の頂上に水煙の代用として寶珠が載せられて然かも六葉の下から四條の鐵鎖を各々隅に垂れ風鐸を吊して美觀を添へてゐる塔の外部は全部丹塗ではあるが内部は白木造で、内陣天井組入折上天井でなか〳〵巧緻に出來てゐ

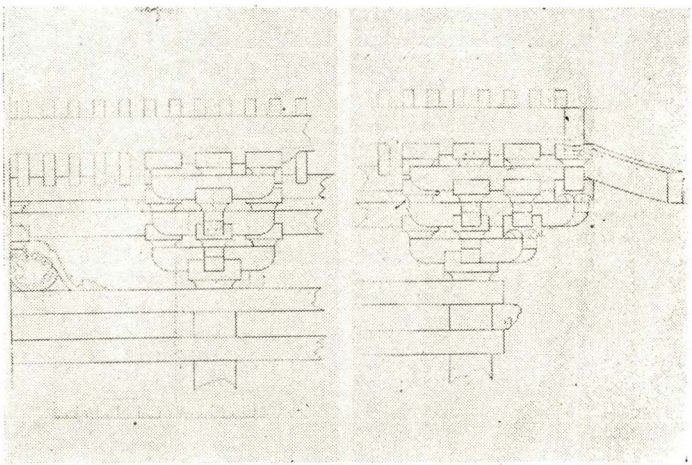
て賞讃すべきである。

入口は二面板兩開戸にて正面兩開板戸の內部に格子戸を嵌め込み、窓は櫺子窓となつてゐる。

內部の須彌壇には大日如來を安置し右脇壇持國天、左脇壇多聞天を安置し凡てが鎌倉中期の作品としては傑作の一として憚らない。

多寶塔は總て重層であるから五重塔や三重塔に比して、威嚴・莊重の感は些か欠けてゐる樣であるが上層が圓形に出來てゐる權衡のよいやまた屋根の檜皮葺の勾配の緩やかな點から寧ろ曲線の輪廓が優雅、輕快、纖細の調和を作り、色彩に於ても青銅色の相輪に樺色の屋根丹塗の木部に白色の龜腹、青磁の櫺子窓、美妙な配色と自然の背景美と共に一種獨特の表現を示してしとやかな美しいものである事を認められる。

尙昨年金堂改築に際して小屋、棟木の上から出た卒塔婆の一種は特に注意すべき考古資料にて長さ一尺・經七寸の圓筒形のものにて、こは數千本の小さき卒塔婆を束ねたもので一枚の厚さ五厘幅三分位のものに兩面に墨書にて經文を描き是を中心より渦卷形にしたものである。此の種のものは伊豆修繕寺にある外他には一寸類例のない珍奇なものとされてゐる。



慈眼院多寶塔詳細圖

多寶塔と金堂とは南面して一直線上に建ち前にはかなりの廣場がありて御手洗川の筧の樣な小さい淸流によつて大井關神社との境となし背後には大井關山を背ひ神社の南、大井關川の溪流は岩石疊々として松檜繁茂せる中を水音緩やか

に流れて靜寂な森の影には鎌倉文化の薫香はその遺物をして或る一つの神秘の律動を無言の裡に美妙なる音樂を奏でゝゐる。

『凍れる音樂（フローゼン・ユシック）』こうした感じはいつどこのいゝ建築に接したときにも必ず沸いてくる美しさである

□　□　□

一巡してもとの座敷に歸つて久しく味ひ得なかつた靜寂な生活に暫し疲れ切つた五體を憩はせてゐると、いつとはなしに時の流れがしみ〴〵と覺えて此の山寺にもよく千年の過去を偲び六百年の古藝術に接して剛健、激越な鎌倉氣風に思ひを運ばせて建築の上に表現された時代思潮が歷史繪の巻物でも繰り展げてゐる様に眼の前にチラついて來る。

折しもどこからとなくボー〳〵と工場の汽笛が鳴り響いた　……幻滅の悲哀！……尊い此の情調を心なきスチームのホイツスルに打ち破られてあの汽罐の高熱と目まぐるほしい機械の廻轉とを聯想したとき腹立しいまでに焦燥を感じて一度に慌立しくなつて來た。

寺を辭してもと來た反對の細道から街道へ出ると道と並松との間に池があつて老松の蔭は靜かに水面に映ゐて晝下りの鈍い灰色の射陽は寺の塀の白堊壁に投げてゐた。（丁）（一九二四、一、一三）

のどけさは袖に知られてから衣

昨日にも似ぬ春の初風

大阪の住宅

玄黄

×先づ、現在棟數から云ふと、最近の調べ——と云つた處で、大正十一年末の現在ではあるが、總戸數二十三萬九千〇〇四棟で、それに、住宅以外の家屋數一萬四千五十八棟を加へると、二十五萬三千〇六十二棟が、大大阪市の包容してゐる總棟數である。

×之を、大正元年に於ける現在二十二萬〇四百五十棟に比べると、十年間に、三萬二千六百八戸即ち一割八歩三厘といふ增加になつてゐる。一時住宅饑饉を叫び、地面には、大都市としての急速なる膨脹を驚いた割りには、家屋の增加率、換言すれば、大都市膨脹を家屋の增加に象徴された現象が割合いに低い、といふ感無きを得ない。

×今少し上記の大正元年に於ける家屋總棟數の内容に立ち入つて見ると、住宅としては、二十萬六千二百八十九棟で、住宅以外の家屋數は、一萬四千百六十五棟、即ち、後者に於ては十年間に百〇七戸の減であるに過ぎないから、件の一割八歩餘といふ增加は、悉く住宅のそれだ、と云ふて可い×併し、大正元年より同十一年までの間に於ける家屋增減の動態は、勿論一樣でなくして、種々なる曲線を畫いてゐるから今之を一瞥することは、その過程を詳とする上に於て必要の事であらうと思ふから、左に百分比を以て現すことゝしよう。

×假りに、大正元年に於ける上記住宅の總棟數二十萬六千二百八十九棟を『百』とすれば、凡そ左の曲線を畫いてゐる。

大正二年百〇二・一（住宅增加數 四五三一棟 其他增加數（減） 六棟）

三年百〇三・八（住宅增加數 七八六五 其他增加數（減） 一一二）

四年百〇四・一（住宅增加數 八四七二 其他增加數 二〇九）

五年百〇五・五　（住宅増加數　一一四二一）
　　其他増加數（減）　二四）
六年百〇六・四　（住宅増加數　一三三七六）
　　其他増加數　一四二）
七年百〇七・六　（住宅増加數　一五七七二）
　　其他増加數　五九）
八年百〇八・三　（住宅増加數　一七一二八）
　　其他増加數（減）　八一七）
九年百〇九・一　（住宅増加數　一八七五九）
　　其他増加數（減）　四五）
十年百十二・二　（住宅増加數　二五三六五）
　　其他増加數（減）　一四〇）
十一年百十五・七　（住宅増加數　三二七一五）
　　其他増加數（減）　一〇七）

さらに、上記十箇年間に於ける現住家屋と空家との關係を一瞥すれば、凡そ下記の通りになつてゐる。卽ち、前記の如く住宅は追年遞加を示してゐるが、空家筋に於ては、一低一昻だ面白い曲線を畫いてゐる。蓋し、住宅の增加は都市發展の趨勢を語ると共に、空家數の昻低は都市の經濟的消長を示せるものと觀て可からう。

先づ、大正元年に於ける空家現在數一萬千七百八十四棟を『百』として、その消長を觀む歟、

大正二年　百〇八・九　（九九四棟）
三年　百五一・九　（六一一八）
四年　〇九九・七　（減三八）
五年　〇十・八　（減九九五〇）
六年　〇〇・五　（減一一二〇）
七年　〇〇・五　（減一一二一〇）
八年　〇〇・三　（減一一四四三）
九年　〇十・四　（減一〇九八六）
十年　〇十・一　（減九九六四）
十一年　〇十・八　（減九七一六）

ざつと彼樣な割合になるが、之によつて見れば住家の年々遞加せる他面には、家屋も遞次減下して、大正六、七、八年が最も減少率の多きを示しさらに亦少しく增加の動きを現はしてゐる。

此處で、ちよいと前へ歸つて、住宅の增加傾向を、表家と裏家との關係に就いて觀れば、大正元年に於て、表家は十三萬四千三百三十三棟、裏家は七萬千五百五十六棟であつたものが、大正十一年には、表家十五萬五千四百九十八棟、裏家八萬三千五百〇六棟、則ち、表家に於て二萬千百六十

五棟＝十五・七％を＝、裏家に於て一萬千五百五十棟＝十六％を増加した割合になる。

之を、空家と現住家屋との關係を觀るに、大正元年に於て、現住は、表家十二萬七千三百四十七棟、裏家六萬七千百五十八棟なりしものが、大正十一年には、表家に於て二萬六千六百三十棟を増して、十五萬三千九百七十七棟と成り、裏家は一萬五千八百〇二棟を増して、八萬二千九百六十棟となつてゐる。則ち、前者に於て二十・九％を、後者に於て、二十・六％五を増してゐる勘定である。

さらに、空家に於ては、大正元年に、表家六千九百八十六棟、裏家四千七百九十八棟なりしものが、大正十一年現在は、表家に於て五千四百六十五棟を減じて、僅に千五百二十一棟と成り、裏家に於ては、四千二百五十二棟を減じて、五百四十六棟となつてゐる。之を比例すると、表家は七割七歩、裏家は殆むど九割を減じてゐる。參考として、左に第一表乃至第三表を掲げて置かう。

住宅數

第一表

（大正十一年末現在）

	表家			裏家			合計			其他
	現住家	空家		現住家	空家		現住家	空家	計	
西區	五一、八七七	一、一九二		二四、九六三	三四八		七六、八四〇	一、五四〇	七八、三八〇	三、〇二〇
南區	四二、七三	二四		二五、五七八	七五		六八、三〇〇	四九	六八、三四九	三、六二八
東區	三二、四七五	一三〇		二三、八五一	二七		三五、三二六	一五七	三五、四八三	四、八六九
北區	三六、九〇三	一七五		一九、五六八	一四七		五六、四七一	三二	五六、七九二	二、五四一
計	一五三、九七七	一、五二一		八二、九六〇	五四六		二三六、九三七	二、〇六七	二三九、〇〇四	一四、〇五八

第二表

大正十年	一四七、八〇三	一、三九六	八二、〇三一	四二四
同 九年	一四四、一三	三四二	八〇、一三八	四五六

二三九、八三四	一、八二〇	二三一、六五四	一四、〇二五
二三四、二五〇	七九八	二三五、〇四八	一四、一二〇

同	八年	一四五、三五三	二六七	七七、七三三	七四	二三三、〇七六	三四一	二三三、四一七	一三、二四八
同	七年	一四四、一六五	三七七	七七、三三三	一九七	二三一、四八七	五七四	二七一、〇六一	一四、二三四
同	六年	一四三、四二七	三三五	七五、六六一	二四二	二二九、〇八八	五七七	二二九、六六五	一四、三〇七
同	五年	一四〇、八六九	一、一〇五	七五、〇〇七	七二七	二二五、八七六	一、八三四	二二七、七一〇	一四、一三一
同	四年	一三三、〇三四	六、八一八	六九、九八一	四、九二八	二〇二、〇一五	二一、七四八	二二四、七六一	一四、三七四
同	三年	一三九、三九六	九、九〇〇	六六、一五六	八、〇〇一	一九六、一五二	一七、九〇二	二二四、一五四	一四、〇五三
同	二年	一三〇、〇四六	七、三八八	六七、九九六	五、四二〇	一九八、〇四二	一三、七七八	二一〇、八一〇	一四、一五九
同	元年	一二七、三四七	六、九八六	六七、一五八	四、七七八	一九四、五〇五	一二、七八四	二〇〇、二八九	一四、一六五

本表は戸前數を實地に就き調査せしものなり大正十年及其以前は單に宿直員が宿泊するに過ぎざる官舍、社寺、學校、病院、製造場、勸商場及興行場等は住宅欄に記し大正十一年は其他欄に含む

第三表

大正十年表

		家		裏家		合計		其他
現在	住家	空家	現住	空家	現住	空家	計	
西區	四八、八〇三	一、一三五	二二、七九一	二七八	七〇、五九三	一、四一三	七二、〇〇六	四、一六七
南區	四二、八四一	五九	二五、六五七	四一	六八、四九八	一〇〇	六八、五九八	三、一三九
東區	二二、七一五	六二	一二、九〇二	五九	三五、六一七	一二九	三五、七三六	四、二四七
北區	三五、四四五	一四〇	一九、六八一	四八	五五、三二六	一八八	五五、三一四	二、四七二
計	一四七、八〇三	一、三六九	三二、〇三二	四二四	二二九、八二四	一、八二〇	二三一、六五四	一四、〇二五

次に、宅地坪數と家屋現在數の關係を觀むに、是れに就いて、最近の調査としては大正十年に於ける現在數の外適當な材料なきを遺憾とするが、之に據つても、先づ大阪市のそれ等に關する大體の趨勢を察知し得ることゝ信ずる○

是れに據れば、大正元年に於て、宅地總坪數六百〇五萬九千二百八十二坪にして、家屋數二十萬六千二百八十九棟、即ち一千坪に付三十四棟五有

してゐる割合である。而して、その地坪内の人口は、二百十九人八三といふ割合になつてゐるが、大正十年に到つては、六十萬五千七百十六坪即ち僅に百分の一を增して、六百六十六萬五千九百九十八坪と成り　家屋數は、二十五棟三六五を增して、二百三十一棟六五四となつてゐる。而して、その人口は却つて十七人九の減少を示して二百棟一人九三となつてゐる。

宅地に對する現住戸數

	宅地坪	家屋數 戸	現住戸數 戸
西區	一、九六八、八二五	七二、〇〇六	八七、五四六
南區	一、八九二、六二一	六八、五八八	一〇一、五四一
東區	一、二一〇、二六四	三五、七三六	四二、二七四
北區	一、六八四、二九八	五五、三一四	六八、九六三
計	六、六五五、九九八	二三一、六五四	三〇〇、三二四
大正九年	六、五五二、六四四	二二五、〇四八	二七六、三三一
同八年	六、四六九、一八	二二三、二〇九	二七六、二二七
同七年	六、三五〇、七八五	二二一、〇六一	二七一、一八九
同六年	六、二三三、三四八	二一九、六六五	二七二、四一五
同五年	六、一八七、一四九	二一七、七一〇	二七一、八三九

尤も、大正元年より十年までの間、凡てが漸次增加し來れる内、大正三年に於て、坪數減少の傾向を示せるに、家屋は尚は遞加せるは注意すべき現象である。

尙ほ玄黄子は記すべき種々なる觀察點を有つてゐるが、今その暇なきを以て、左に表示して讀者の資料に供することゝする。

（大正十年末現在）

宅地千坪に對し	家屋數 戸	現住戸數 戸	現住人口 人
西區	四〇二、三五八	四四、六二	〇四、〇六
南區	四三二、五八三	五三、六五	二八、五六
東區	二〇五、〇八〇	三七、七三	一八三、〇三
北區	三〇六、四五〇	四〇、九四	一八二、九四
計	一、三四一、四七一	四五、〇五	二〇一、九六
大正九年	一、二五二、九七二	四二、一七	一九一、二〇
同八年	一、五八三、六五〇	四八、八七	二四、四八〇
同七年	一、六三三、三三八	五〇、五七	二五七、一九
同六年	一、五五一、九八六	五二、九四	二五〇、三九
同五年	一、五〇八、六七七	五一、三七	二四三、八四

同	四年	六、一五四、六二一	二二四、七六一	三〇九、〇三七	一、四六〇、二一八	三四、八九	五〇、二一	二三七、二五
同	三年	五、八〇七、三〇三	二二四、一五四	三一三、六四八	一、四二四、五九六	三六、八七	五二、六八	一四五、三一
同	二年	六、一〇九、四七七	二一〇、八二〇	三〇一、〇六一	一、三八、九〇九	三四、五一	四九、二八	二三七、三四
同	元年	六、〇五九、二八九	二〇六、二八九	三〇六、七三一	一、三三一、九九四	三四、〇五	五〇、六二	一九、八三

家屋數は戸前數を現住戸數は竈數を掲げたるものなり。大正九年の戸數は國勢調査の結果に依る

建物坪數表

（大正十二年三月末現在）

	家	下家平坪	二階以上	裏家	下家平坪	二階以上	合計
木造建物							
西區	七、一四七	九五四、八四三	三八〇、八二六	七八三	八七、八八一	四一、二一〇	一、四七一、七〇〇
南區	八、八九一	六八六、四四八	三五一、八五三	四一八	一五三、〇一九	六四、七二八	一、二六五、六二
東區	六、一三一	三八三、九二九	二〇七、六八二	二六五	八七、五六一	四〇、六一六	七二六、六八四
北區	一、〇六一	四九九、八六四	二一一、一七四	三一	二〇九、九四一	九〇、九二七	一、〇〇二〇九九九
計	二三、二三〇	二、五二五、〇八四	一、一五一、五四五	一、四七九	五三八、四〇二	二三七、四九一	四、四六七、二五〇
其他建物							
西區	三、九一四	一七一、六四二	五一、八二三	—	二、三二〇	一、五八二	二三一、二八一
南區	三、五六六	二六、七四二	一五、九七六	六五	二、四七一	二、一四九	五〇、九六〇
東區	六、六九〇	六一、一八一	六四、三九四	—	三、七五一	三、三〇一	一三九、三一七
北區	五、一一五	一二八、七三〇	四七、一九六	七〇	一〇、八七七	四、八九二	一八六、八八〇
計	一九、二八五	三七八、二九五	一七九、三八〇	一三五	一九、四一九	一二、九二四	六〇八、四三八
合計	四二、五一五	二、八九三、三七九	一、三三〇、九二五	一、六三二	五七、八二三	二四九、四一五	五、〇七五、六八八
大正八年	？	？	？	？	？	？	四、六〇八、八五二

下家とは地下室等路面以下のものを平坪とは第一階の建坪を云ふ

大正八年は年末現在を掲ぐ

日本建築協會々報

日本建築協會會則

第一條　本會ノ目的ハ我國建築界ノ堅實ナル發展ヲ期スルニ在リ

第二條　本會ハ日本建築協會ト稱ス

第三條　本會ハ事務所ヲ大阪市ニ置ク

第四條　本會ハ人格、學識、經驗アル建築家ヲ以テ會員トス

會員ノ氏名住所ハ會員名簿ニ之ヲ記載ス

會員タラント希望スル者ハ會員五名以上ノ紹介ヲ以テ入會希望書及履歷書ヲ本會ニ提出スヘシ其諾否ハ理事會ニ於テ議決ス

第五條　本會ハ其目的ヲ贊成シ事業ヲ援助スル者ヲ賛助員トス

賛助員ヲ分チテ左ノ四種トス

一　名譽賛助員―地位又ハ學識アル名望家

二　終身賛助員―金參百圓以上又ハ之ニ相當スル物件ヲ本會ニ寄附スル篤志家

三　特別賛助員―建築ニ關聯スル特種ノ技術家又ハ事業家

四　普通賛助員―建築ニ關係又ハ趣味ヲ有スル者

賛助員ノ氏名住所寄附ノ金額又ハ物件ハ各賛助員名簿ニ之ヲ記錄ス

第六條　名譽賛助員ハ例會ノ決議ニ依リ本會之ヲ推薦ス

終身賛助員タラントスル者ハ會員貳名以上ノ紹介ヲ以テ申込書及寄附ノ金額又ハ物件ヲ本會ニ提出スベシ其諾否ハ理事會之ヲ議決ス

特別賛助員タラントスル者ハ會員二名以上ノ紹介ヲ以テ申込書及履歷書ヲ本會ニ提出スベシ其諾否ハ理事會之ヲ議決ス

普通賛助員タラントスル者ハ會員ノ紹介ヲ以テ申込書ヲ本會ニ提出スベシ其諾否ハ理事會之ヲ議決ス

第七條　會員ハ會内ニ於ケル其言行ニ付會外ニ於テ責ヲ任ゼザルコトヲ得

名譽賛助員ハ本會ノ優遇及第十九條ニ基キ相當ノ利得ヲ受ク

終身賛助員、特別賛助員及普通賛助員ハ第十九條ニ基キ會誌ノ配布其他各相當ノ利得ヲ受ク

第八條　會員ニシテ脫會セントスル者ハ其旨ヲ本會ニ申込ムベシ

前項ノ規定ハ賛助員ニ之ヲ準用ス

第九條　本會ハ會員ニシテ本則ノ規定ニ違背シ又ハ本會ノ名譽ヲ汚スノ行爲アリト認メラルル者ニ對シ理事會ノ決議ヲ經テ其權利ヲ停止シ若ハ之ヲ脫會ヲ勸告シ又ハ例會ノ決議ヲ經テ之ヲ除名スルコトヲ得

前項ノ想定ハ賛助員ニ之ヲ準用ス

第十條　脫會其他ノ事由ニ因リ會員タルノ資格ヲ失ヒタル者ハ既納會費ノ返還ヲ求メ又ハ其債務ヲ免カルヽコトヲ得ズ

前項ノ規定ハ賛助員ニ之ヲ準用ス

第十一條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

一　會頭　一名

二　副會頭　一名

三　理事長　一名（理事長タル理事ヲ含ム）

四　理事　十名（理事長タル理事ヲ含ム）

會頭ハ會務ヲ總監シ本會ヲ代表ス

副會頭ハ會頭ヲ補佐シ會頭事故アルトキ其職務ヲ代理ス

理事長ハ會務ヲ總理シ會頭、副會頭事故アルトキ其職務ヲ代理シ理事會ヲ代表ス

理事ハ會務ヲ處理シ理事長事故アルトキ理事會ノ決議ニ依リ其職務ヲ代理ス

第十二條　役員ハ名譽賛助員中ヨリ例會ニ於テ之ヲ選舉ス但會頭、副會頭、理事長ハ理事之ヲ互選ス

役員ノ任期ハ二年トス　但シ理事長ニ付テハ一年トス

理事ノ改選ハ毎年半數トス但引續キ重任スルコトヲ得ズ

第十三條　本會ニ左ノ職員ヲ置ク

一　主記　一名

二　主計　一名

三　編輯　三名

四　編輯補　若干名

五　書記　若干名

主記ハ庶務ヲ、主計ハ會計ヲ、編輯ハ編纂ヲ處理ス

編輯補ハ編輯ノ旨ヲ受ケ編纂ヲ分掌ス

書記ハ理事長、理事ノ命ヲ受ケ會務ニ從事ス

第十四條　主記、主計、編輯ハ理事之ヲ互選ス

編輯補ハ會員中ヨリ理事會之ヲ指名ス

書記ハ理事會之ヲ任命シ有給ト爲スコトヲ得

第十五條　本會ハ調査研究ノ必要ニ應シ例會ノ決議ニ依リ各部ノ委員會ヲ設ケ各部ニ委員長一名委員若干名ヲ置ク

委員長及委員ハ會員中ヨリ理事會之ヲ指名シ委員長ハ當該委員ノ互選トス

理事會ハ特殊事項ニ關シ會員外ノ專門家ヲ囑託委員トナスコトヲ得

第十六條　委員長ハ當該委員會ヲ代表シ委員長事故アルトキハ當該委員會ノ決議ニ依リ委員其職務ヲ代理スベシ

委員會ノ經過ハ例會ニ於テ之ヲ報告ス

委員會ノ調査研究報告ハ例會ノ決議ヲ經テ本會ノ名ヲ以テ之ヲ發表ス但シ緊急事項ニ付テハ理事會ノ承認ヲ經テ當該委員會ノ名ヲ以テスルコトヲ得

第十七條　本會ハ毎月一回會員ヲ召集シ例會ヲ開キ重要事項ヲ審議シ報告會、講話會、討論會又ハ講演會ヲ催ス但理事會ハ必要ト認ムルトキハ臨時之ヲ開催スルコトヲ得

例會ニ於ケル議案其他ノ事項ハ理事會之ヲ會員ニ通告ス但緊急事項ニ付テハ此限ニ在ラズ

第十八條　本會ノ事務ハ春秋二季大會ヲ擧行ス

第十九條　本會ノ行フ事業左ノ如シ

一　建築ニ關スル講話會

二　建築ニ關スル調査研究報告ノ發表

三　建築ニ關スル重要事項ノ議決

四　會誌ノ發刊

五　建築ニ關スル圖書ノ刊行

六　建築ニ關スル講演會ノ開催

七　建築ニ關スル展覽會ノ公開

八　建築ニ關スル視察

九　建築ニ關スル有志者ノ親睦會

十　理想的建築ノ計畫

十一　其他建築ニ關スル有益ナル事項

第二十條　會員ハ會費年額金拾八圓ヲ本會ニ醵出ス

但例會ニ出席シ難キ地方ニ在ル會員ノ會費ハ半額トス

一時ニ金貳百圓以上ヲ出ストキハ爾後前項ノ會費ヲ免ル

會員タルノ承認ヲ得タル者ハ入會金五圓ヲ本會ニ納付スベシ

特別賛助員ハ特別賛助員年額金九圓ヲ、普通賛助員ハ普通賛助員年額金六圓ヲ前納スベシ

但六期以内ニ之ヲ分納スルコトヲ得

第二十一條　本會ノ經費ハ會員金寄附金賛助員其他ノ收入ヲ以テ支辨ス

本會ノ財產ハ理事長之ヲ監理ス

第二十二條　本會ノ財產債權債務及毎月ノ收支ハ主計其計算書ヲ作リ翌月理事會ニ報告ス

本會ノ財產債權債務及毎年ノ收支ハ理事會其決算書ヲ作リ翌年一月例會ニ於テ報告ス

第二十三條　本會及本則ニ關スル詳細ノ事項ハ例會ノ決議ニ依リ之ヲ細則ニ定ム

第二十四條　本則ハ例會ノ決議ニ依リ之ヲ變更スルコトヲ得



會報

一、當協會發行の雜誌「建築と社會」の表紙更新のため先般來懸賞圖案を募集致しました結果應募數總計六十六通ありまして審査の上左の通入選十一月例會に發表して賞金授與式を行ひました

第一等當選（賞金五十圓）　權藤　要吉氏

大阪府東成郡田邊町南田邊字松原

第二等當選（賞金三十圓）　村上　文鄕氏

大阪市北區眞砂町四十二番地

第三等當選　賞金二十圓）　岩本　眞人氏

大阪市北區本庄黒崎町一區二九號

選外佳作（賞金十圓）　森西龍太郎氏

一、大正十一年秋本協會が擧行致しました住宅改造博覽會殘務も昨年十一月全く終了して博覽會部よりの引繼も完了しましたので關係役員一同へ感謝の微意を表するため記念品を贈呈することになりまして左の十四氏に對し十二月例會に於て贈呈致しました

子爵後藤新平閣下、工學博士片岡安氏、葛野壯一郎氏、小笠原鈎氏、横濱勉氏吉木久吉氏、宗兵藏氏、波江悌夫氏、内藤太郎氏、中西甚作氏、野呂長四郎氏、松本禹象氏、舟橋喜一氏、瀨戸文吾氏

一、本協會は帝都復興に關し昨年十二月十八日當路各大臣及帝都復興院總裁に對し左記の建議書を提出し一面貴衆兩院議員其他へも右印刷配布の上御高配を願ひました

建　議　書

日本建築協會は帝都復興に關し左記事項を願慮せられ速に適當の處置を採られんことを希望す

右及建議候也

大正十二年十二月十八日

日本建築協會副會頭工學博士片岡安

記

一、帝都復興に關しては國都百年の計を樹て之を理想と爲すの必要あると共に其實施を爲さんとするには實に逸すへからさる絶好の機會なりと確信す而して從來當局に於て計畫中の復興事業は規模小に過るの嫌あるを以て之を更に大擴大すると同時に特に東京市域中宮城及國の行政に必要なる機關を包括する適當の地區を劃して帝都區と爲し此區域内を絶對安全なる美觀地區たらしむること

之か爲帝都區内の施設物に對しては特別の法令を設け構造其他を制限するのみならず之に對する補助等も他の部分に比し特に高率なるものとし帝都區と東京市とは廣場、公園、河川廣路の類を設けて之を區劃するものとす

一、東京及横濱兩市の各區域は帝都區の計

畫を基準とし之に關聯して計畫實施すること

一、本協會會則により十二月例會に於て理事半數改選を行ひ左の五氏當選しました
伊藤正文氏、田中網氏、中澤誠一郎氏
中村琢治郎氏、松本禹象氏

一、又本年留任理事宮本金七氏は理事辭退せられましたので補缺選擧の結果左の通當選となりました
本多　二郎氏

一、本年度役員分掌は左の通互選により決定致しました
(理事長)池田宇氏(主計)設樂貞雄氏、中澤誠一郎氏(主計)中村琢治郎氏、松本禹象氏(編輯)本田登氏、佐藤彰美氏、本多二郎氏、伊藤正文氏、田中網氏
尚臨時會務委員は一月十二日新舊理事會を終り廢止致しました

一、十二月例會で設置のことに決定の教化委員は左の諸氏に指名決定なりました
井上新二氏、小笠原銅氏、園部文雄氏
野呂長四郎氏　藤井厚二氏、古守田實
氏酒井勇三　氏　宮本長治氏、遠谷五郎氏、姫野武氏、本野精吾氏

一、十二月例會の決議によりまして會則の一部左の通改訂することになりました
A、第十三條中主記一名を二名主計一名を二名編輯參名を五名に改訂
B、第十三條中第四號を削り第九號を第四號に繰上く
C、第十三條中第三項「編輯補は編輯の旨を受け編纂を分掌す」を削除
D、第十四條中第二項「編輯補は會員中より理事會之を指名す」を削除

左記諸氏の計報に接し誠に哀悼の至に堪へません本協會よりは弔狀を發送致しました
名譽贊助員　小山健三氏　大正十二　十二月二十一日逝去
普通贊助員　北條時一氏　大正十二年十二月十二日逝去
普通贊助員　吉住義一氏　大正十三年一月十二日逝去

會合

○都計委員會

△日時　十二月十一日(火)午後五時——六時三十分
△會場　本協會會議室
△出席者　横濱勉(委員長)池田谷久吉(主査)伊藤正文、本多二郎、小笠原銅、宮本長治、置鹽章(以上四大都市都計分科會委員)園部文雄(主査)石本喜久治、中澤誠一郎安井武雄(以上帝都復興分科會委員)の各委員
△記事　一、帝都復興分科會の審議作成したる建議案に付凝議の上可決し至急理事會に報告することに決し散會す

○四大都市都計促進委員會(都計分科會)

△日時　十二月十一日(火)午後六時三十分——八時三十分
△會場　本協會會議室
△出席者　横濱勉(委員長)池田谷久吉(主査)伊藤正文、本多二郎、小笠原銅、宮本長治、置鹽章の各委員
△記事　一、四大都市都市計畫促進に付建議案作成の爲協議立案したるも終了に至らず
一、次回本分科會を來る十二月十四日(金)午後五時開催することに決し散會す

○臨時理事會

△日時　十二月十二日(水)午後五時——八時
△會場　本協會會議室
△出席者　池田理事長、園部理事、野呂理事谷會務委員、宗會務委員、野村會務委員
△議事　一、帝都復興に關する建議案の件
帝都復興に關する建議案に付都計委員會にて審議作成したる立案報告ありたるを以て該案に付凝議の結果修正を加ふることとし決議に至らず散會

○四大都市都計促進委員會(都計分科會)

△日時　十二月十四日（金）午後五時——六時
△會場　本協會會議室
△出席者　橫濱勉（委員長）池田谷久吉（主査）小笠原銅、置鹽章、谷民藏、宮本長治各委員
△記事　一、四大都市都市計畫促進に關する建議案作成に付前回に引續き審議す
一、右建議案作成終了に付都計委員總會に附議することに可決散會

○都計委員會

△日時　十二月十四日（金）午後六時　八時三十分
△會場　本協會會議室
△出席者　橫濱勉（委員長）池田谷久吉（主査）小笠原銅、置鹽章、谷民藏、宮本長治（以上四大都市分科會委員）園部文雄（主査）石本喜久治、小川安一郎加藤善吉（以上帝都復興分科委員）
△記事　一、四大都市都計促進分科會に於て作成したる建議案を議題として協議の結果該案を理事會に報告することに可決し散會す

○臨時理事會

△日時　十二月十七日（月）午後四時——六時
△會場　本協會會議室
△出席者　池田理事長、園部理事、野呂理事、設樂理事、宮本長理事、宮本金理事、小川會務委員、宗會務委員、安井會務委員
△議事　一、都計委員會より報告に係る建議案に關する件
帝都復興に關する建議案の修正したるものに付審議の上本日の例會に附議することに可決
一、理事辭退に關する件
今回理事宮本金七氏理事辭退届出に付協議の結果承認のことに可決し十二月例會に於て補缺選擧を行ふことに決す

○例會

△日時　十二月十七日（月）午後六時——十時
△會場　大阪市中央公會堂中集會室
△出席者　理事長池田實、理事園部文雄、野呂長四郎、設樂貞雄、宮本長治、宮本金七、會務委員宗兵藏、小川安一郎、安井武雄、會員小西一眞、本村清、流石信夫、森篤次郎、佐々木昌雄、下浦光惠、長野金太郎、瀧邦一、姫野武、村上武、竹中景一、高田利一郎、楠田實、谷田實、池田谷久吉、林止信後藤信勝、橫田勉、加藤善吉、近澤武男、日高胖、小笠原銅、久保田繁亮、松永次松片岡勇夫、豊島義政、天羽六郎、竹平孫二、濱田正三、澤原隆夫、佐々木岩次郎、和田貞治郎、山本辰次郎、須川熊太郎、山脇友三郎、藤村武、前田清二、楠瀬徹、今林彦太郎中村吉太郎、阪井米吉、岡本茂樹、羽原德衛、宮崎治三吉、山中宗三郎、岸平、中澤誠一郎、早良俊夫、橋本舜介、内川一賢、高井芳雄、中島智喜、呼子正、毛利泰三、辰野政二、永野房吉、葛野壯一郎、池田宮彦、松本儀八、村野藤吾、瀬戸強三郎、三木來三、坪井誠一、中島春次、平井三郎、友田藏、林眞三、山下岡太郎、山口榮作、石本喜久治、島田良馨、川村種三郎、松本一太郎、前田武正、伊藤正夫、武田經一、菅源之助、吉井長七、長澤榮作、吉田健治、新海正綱、谷口廉兒、松本一太郎、山本久吉、辻德、境正一米田充太郎、朝永國次郎、吉木久吉、本多二郎、土居原龜之助、工藤榮治郎諸氏
△記事　一、定刻池田理事長開會を宣し直に左の諸氏に對し會誌表紙圖案懸賞金の授與式を行ふ

第一等當選者　櫃藤　要吉氏
第二等當選者　村上　文鄕氏
第三等當選者　岩本　眞人氏
選外佳作者　森西龍太郎氏
二、右了り引續き大正十一年開催の住宅改造博覽會役員及常時の理事者左の諸氏に對し記念品贈呈式を行ふ

予討	後藤　新平閣下
工學博士	片岡　安氏
葛野壯一郎氏	
小笠原　銅氏	
楠濱　勉氏	
吉木　久吉氏	
宗　兵藏氏	

波江　悌夫氏
内藤　太郎氏
中西　甚作氏
野呂長四郎氏
松本　禹象氏
舟橋　喜一氏
瀬戸　文吾氏

三、次に役員半數改選を行ひ開票の結果左の五氏當選せり

二四票　當選　中澤誠一郎氏
一七票　當選　中村琢治郎氏
一二票　當選　松本　禹象氏
一二票　當選　伊藤　正文氏
一二票　當選　田中　綱氏
一一票　次點　本多　二郎氏

四、留任理事宮本金七氏今回理事辭退に付補缺選擧を行ふへきも便宜右半數改選の次點者を以て補缺員となすことを諮りし結果滿場一致を以て左の通補缺理事決定す

補缺當選　本多　二郎氏

五、右選擧終了せし後元住宅改造博覽會幹事長葛野壯一郎氏より記念品拜受に付一場の謝辭を述らる

六、之より議事に入り先つ座長を選ひ池田理事長當選可決し同理事長席に着き主記をして左記議事を一々説明せしめ賛否を諮る

1、會則一部改訂の件

A、第十三條中主記一名を二名、主計一名を二名、編輯三名を五名に改訂

B、第十三條中第四號を削り第五號を第四號に繰上く

C、第十三條中第三項「編輯補は編輯の旨を受け編纂を分掌す」を削除

D、第十四條中第二項「編輯補は會員中より理事會之を指名す」を削除

右は一名の異議者なく原案可決す

2、教化委員會設置の件

本件に付ては一二設置反對論者もありしか設置説多數にして可決し委員及委員數は理事會に委任の事に決す

3、臨時會務委員廢止の件

右は園部主記より設置並廢止の理由を説明し廢止のことに決し廢止時期は新舊理事事務引繼の時を以て終了したることに決す

七、此間五分間の休憩をなし再開諸種の質問ありて議事に入る

4、帝都復興に關する建議案の件

横濱都計委員長より帝都復興並四大都市都計促進委員會經過報告ありて座長より帝都復興に關する建議案の審議を乞ふ旨を述へ建議案を配付す園部同會主査より建議案の説明をなし先つ建議するや否に付採決の結果滿場一致を以て可決し次て字句修正論者ありしを以て座長指名の下に左記三名を修正委員に選定し別席にて修正することとなる

葛野壯一郎氏　設樂貞雄氏　安井武雄氏

修正案に付協議の結果滿場一致可決す（拍手賛成）

八、次て園部主記より左記報告ありて解散す

1、各地に於ける講演會の件

十一月五日岡山市に於ける講演會
十一月六日堺市に於ける講演會

2、大阪美術協會に關する件

3、會務報告

○臨時理事會

△日時　十二月二十四日（月）午後五時——九時三十分

△會場　本協會會議室

△出席者　池田理事長、園部理事、野呂理事、設樂理事、宮本長理事、小川會務委員

△議事　一、博覽會部より引繼に係る本館其他の資却代金殘金收受に關する件
一、博覽會部より引繼金處理に關する件
一、新舊理事打合會に關する件
日時、會場、議事決定
一、大正十三年一月例會に關する件
會場、報告事項、議事等決定
一、會員銓衡

○新舊理事會

△日時　一月十二日(土)午後五時——九時三十分
△會場　魚岩
△出席者　池田實、佐藤彰美、本多二郎(以上留任理事)伊藤正文、田中綱、中澤誠一郎、中村琢治郎、松本禹象(以上新任理事)野呂長四郎、園部文雄、宮本長治(以上退任理事)小川安一郎、谷氏藏、宗兵藏、野村一郎、安井武雄(以上會務委員)
△議事　一、教化委員會委員銓衡の件
池田理事長より右委員として十一名指名し各理事の贊成を得て議決一月例會に發表することとなる
一、大正十二年度收支決算の件
宮本主計より報告說明ありて承認
一、大正十三年度收支豫算の件
宮本主計より報告說明の上各理事の手許へ豫算表を配付し意見を徵することとなる
一、大正十二年度事業報告の件
園部主記より報告ありて承認
一、役員事務分掌の件
互選の上左の通決定す
理事長　池田實氏
主記　設樂貞雄氏、中澤誠一郎氏
主計　中村琢治郎氏、松本禹象氏
編輯　本田登氏、佐藤彰美氏、本多二郎氏、伊藤正文氏、田中綱氏
一、會員入會勸誘に關する件
一、關西技術者聯合大會本協會委員に關する件

新入會員

(普通贊助員)天野博秀君、松山愛三君、高橋義隆君、井上利男君

○退會者

(普通贊助員)指田近之助君

○死亡者

(名譽贊助員)小山健三君
(普通贊助員)吉住義一君、北條時一君

○住所移轉

片岡長參君　大阪市北區上福島北二丁目一五六
西勝秀太郎君　東京市麹町區有樂町三丁目二番地三井集會所東神倉庫內
影山丈夫君　大阪市西區田中町一五四
中村與資平君　東京市赤阪區青山幸町六丁目三五
森岡達三郎君　神奈縣橘樹郡高津村溝口
村上文鄕君　奈良縣生駒郡龍田町
柳澤彰君　東京市牛込區赤城元町三五
河杉親一君　神戶市松本通三丁目六三ノ五
寺田勇一君　東京府下北豐島郡長崎村字荒井一八六二
有隅千代松君　福岡縣粕屋郡篠栗村
若田久作君　金澤市水車町二〇九淺田外次郎方
森定松之祐君　埼玉縣北足立郡川口町日本麥酒鑛泉川口工場大林組出張所
若林鍊三君　東京府下瀧ノ川町四ケ原五五三島居方
田中浩君　東京市京橋區北槇町日米信託ビルヂング山崎工務所
西田儀太郎君　東京市麹町區永樂町一ノ一丸內ビルヂング五五七區合名會社大阪橋本組東京出張所
足立正雄君　東京市外紀伊郡深草町飯食八二六
藤本賢太郎君　廣島市獅樂町五八清水組出張所
泰光義君　大阪市東區船越町一丁目三六土屋方
河合貞一郎君　東京市麹町區永樂町一ノ一大林組東京支店
小林市太郎君　廣島縣佐伯郡平良村上平良
戶塚端君　東京市日本橋區本町三ノ一竹中工務店
後藤信勝君　大阪市西區築港四條通三丁目三五竹中方

役員及職員

副會頭　片岡安
理事長　池田寶
主事　理事　設樂貞雄
同　理事　中澤誠一郎
主計　理事　中村琢治郎
同　理事　松本禹象
編輯　理事　本田登
同　理事　佐藤彰美
同　理事　本田二郎
同　理事　伊藤正文
同　理事　田中網

編輯係　江村郊邨　伊藤二世子　清川伊佐
庶務係　西谷節　清川伊佐
會計係　田村春松　大和境

會員	二八〇	會員(地方)	一〇九
名譽賛助員	八六	終身賛助員	五五
特別賛助員	二九	普通賛助員	四七〇
合計	(一月二十日現在)		一〇三三

本誌及廣告料定價表

本誌	冊數	定價	郵稅
	一冊	七拾五錢	貳錢
	十二冊	九圓	貳拾四錢

廣告料	種別	金額
	半頁	八圓
	一頁	拾五圓
	特別頁モ料金一定シアリ御照會アリ度シ	

大正十三年一月廿五日印刷
大正十三年二月一日發行　（毎月壹回一日發行）

大阪市外中津町下三番一九八番地ノ一
發行兼編輯人　江村恒一
大阪市東區內淡路町一丁目廿一番地
印刷兼印刷人　大阪活版所
大阪市北區堂島濱通一丁目一番地
堂島ビルヂング
發行所　日本建築協會
電話北四二一九一番
振替口座大阪三九九七五
大阪市西區京町堀羽子板橋北
特約販賣店　柳々堂書店
電話（土佐堀二四〇〇番）
振替口座一〇八四番

●第七集第二号　掲載広告一覧（掲載順）

内外木工所
日本エレベーター製造
大野正営業所
佐倉金庫店
阿部鉄工所
MIDORI SHOKAI
飾磨化学工業
大塚鉄工所
瀧山商店
南満鉱業
野沢幸三郎商店
文化工業
石綿スレート
吉岡商店
高谷商店
山本東作商店
田村商会

建築金物商会
日本洋瓦大阪出張所
金剛商会
今井硝子店
横河橋梁製作所
田中昌司商店
二和商会
HANKEN SEISAKUSYO
井筒政蔵商店
西孫南店
森川組
佐伯捨次郎製作所
大福海上火災保険
浅海商店
出浦建築事務所
大阪建築所
新海建築工務所

小笠原建築事務所
渡辺建築事務所
葛野建築事務所
片岡建築事務所
片岡松井建築事務所
横河工務所
横浜建築事務所
竹内建築事務所
宗建築事務所
国枝工務所
柳下建築事務所
真水工務所
真水三橋建築事務所
遠藤於菟
木子建築事務所
設楽建築工務所
茂、野村建築事務所

岡部建築事務所
前田松本建築事務所
西原衛生工業所
三枝商会
池田勘蔵
日本土木大阪出張所
大阪橋本組
大林組
竹中工務店
長瀬組
中新
佐伯工務所
野村亥之助
久保田組
熊取谷熊次郎
山本組
松村組
小西組
藤木正一

鴻池組営業所
駒井喜兵衛
安藤組大阪出張所
有山組
辰巳吉之助
清水組大阪支店
森本建築社
銭高組
清水福太郎
大阪青写真調製所
山田大理石製作所
矢橋大理石商店
須賀商会
高島屋呉服店
コルク工業
東洋コルク工業大阪出張所
栄進社
松尾和助本店
山本窯業商店

萩原煖房工務所
新田ベニヤ製造所
日本ホロタイル
東京建鉄
河村青写真調製所
宇野沢組ステインド硝子製作所
品川白煉瓦
日本木材工芸
大理石工業
ベニス工房
城口汚水処理研究所大阪支店
米本栄商店
田中タイリング商会
浜口商店
大阪耐火リノリウム工業
岩崎商業
小野田セメント製造
日本建築紙工大阪出張所
日本工剤

高田商会
大阪窯業
桐田商会
政正
関西ステインド硝子製作所
旭硝子
淡陶
川崎工場
日米板硝子
山中商会
北小林酒井衛生工業部
サカイブン建築鉄工所
米山製作所
木下商店
吉田鉄工所
亀井商店
小野田屋根瓦製造所
境川文庫
岡部商会

佳住屋商店
田中源太郎商店
極東板硝子工業
